

はじめに

平成21年度の長岡造形大学デザイン研究開発センターの活動報告をいたします。

本年度当センター受託プロジェクトは、昨年度と同様に市等行政関係から委託されたプロジェクトが多くを占めています。これは地域の中でのこれまでのセンターの成果に評価をいただき、デザインに対してさらなる期待をもつての依頼であると強く感じております。当センターが受託し応えて参りました内容は、まだ十分とは言えませんが、それは誇れるものであります。そして徐々にではありますがデザインが着実に地域に根づいてきていると自負しております。

当センターは、平成6年の開学と同時に大学の附属機関としてスタートし、デザインというカテゴリーで地域社会と密着した活動を行ってまいりました。その目的は、大学での教育研究成果を広く公的機関や団体・企業等に伝えること。また企業等との共同研究を推進し、教育研究の発展および地域社会における創造的研究開発に寄与することにあります。

現在、デザイン制作を受託する割合が殆どですが、できれば共同研究を進めたいと思っています。共同研究となると、成果を得る為に比較的長いスパンが必要なため、互いの時間的な折り合い等、難しい部分があります。ですが、それはきっと教育研究の成果が実りある成果に反映されることと思っています。デザイン大学にある研究機関であるからこそできるクリエイティブな発想。膠着した観念でない新しいデザインの誕生に繋がる高いポテンシャルを当センターは秘めています。是非お声がけ頂き、一緒に長岡から日本ならびに世界へ新たなデザインを発信できればと考えております。

さて、今年度委託いただいたクライアントの皆様方には深く感謝いたします。また、プロジェクトメンバーの方々お疲れ様でした。

長岡造形大学デザイン研究開発センターは、これからもますます地域発展に貢献できますよう活動して参りたいと思いますので、今後ともご支援いただきますようお願いいたします。

平成22年3月

長岡造形大学
デザイン研究開発センター長
鈴木均治

1. 受託プロジェクト報告

受託事業名：

カーポートデザイン開発業務

発注者：三和エクステリア新潟工場

受託期間：平成21年4月1日～平成21年6月30日

プロジェクト主査：土田知也（プロダクトデザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：4年生／石田夏々子、石塚一樹、今井智充、久保田雄樹、福田龍一、星野瑞希、森田 友

●概要

ソーラーパネルを組み込んだ、カーポートのデザイン開発を行った。従来ソーラーパネルは家屋の屋根の上に設置するのが一般的であるが設置のし易さなどを考えたときに、カーポート上を利用するのは極めて理に適っている。しかし、ソーラーパネルを設置するための構造の強化から従来のものより高価なものにならざるを得ないため、付加価値をつけて今までに無い魅力的なカーポートとすることが求められた。

●デザインの方向性

新しいカーポートとして、どのような付加価値を考えるか、工場見学や様々な場所のカーポートの実地調査を行った。

結果、以下の様な機能を考えることにした。

- ・照明（夜間の乗車、駐車を容易にする）
- ・冬用タイヤなどの保管場所の確保
- ・バッテリー及び電動自転車などに対応する充電プラグの設置
- ・清掃、洗車、ワックスがけに便利な機能
- ・自転車置き場

また、ソーラーパネルの向きは南側にある程度の角度をつけて設置するのが好ましいため、最適な方角に調整可能なものが好ましいこと、三和エクステリアの技術資産を生かして、アルミの押し出し成型を生かしたデザインとすることをデザインの方針とした。

●デザイン案

様々なアイデアを展開するなかでデザイン案として以下の2つの方向性にまとめることにした。

A案：屋根、ソーラーパネル、フレーム（柱と梁）を分離したタイプ

構造的に3つの要素を分離し、ソーラーパネルの角度、向きの調製を容易にすると同時に、支柱に押し出し成型部材を使い、そこに様々な機能を付加することができるようにする。

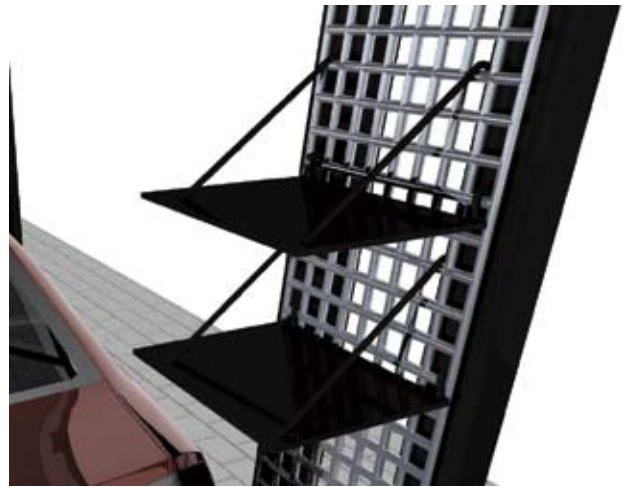
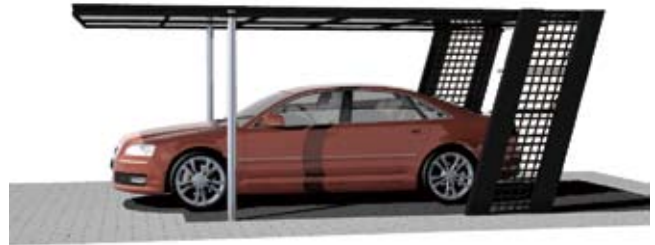
B案：屋根とソーラーパネルを一体化したタイプ

基本的に屋根全体をソーラーパネルとする。柱の太さに変化をつけて車を出し入れする側を細く、後ろを太くする。太くした側に様々な付加機能を与える。支柱が垂直なものと、斜めに処理したモノを提案した。

A案



B案



委託事業名：

2連目盛温湿度計デザイン業務

発注者：シンワ測定株式会社

受託期間：平成21年7月7日～平成21年9月4日

プロジェクト主査：土田知也（プロダクトデザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：2年生／阿部紗貴乃、加藤祐子、小林昇太、斉藤真徳、高瀬あゆみ、星井優希、横尾毅将

●概 要

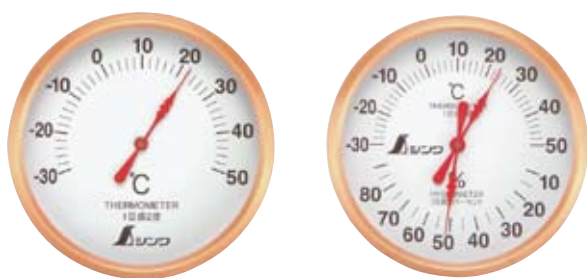
シンワ測定株式会社は金属製直尺・曲尺、ノギス、工作機械等特殊目盛りなどの日本のトップメーカーであり、ホームセンターなので同社の商品を多く見かけることができる。

今回のプロジェクトは、今までの同社のラインナップに欠けていた一般家庭用途の「2連目盛温湿度計」のデザインを、学生に依頼したいという内容であった。

学生の新鮮なアイデアを求めるものである同時に、あくまで商品化することを念頭に置いたプロジェクトであるため、普段の授業では体験しないような細かな条件が設定された。

以下に主な条件を記す。

- ・温度目盛 -30～50℃ 表示角度180°又は220°
- ・数字は10℃ピッチで表示
- ・湿度目盛 0～100% 表示角度180°又は220°
- ・数字は10%ピッチで表示(但し、デザインにより0%、100%の表示は無でも良い)
- ・本体の目盛板部大きさはφ90～100程度のものを2連で温度、湿度を分けて設置する。
- ・スクリーン印刷で目盛線を印刷する為、目盛板は平面であること。ベースの色は自由
- ・色付けについては3色印刷までとする。
- ・外観部はプラスチック成形品で構成される。
- ・商品の位置づけは一般家庭や事務所などに、設置されるものとする。
- ・ホームセンター店頭などで購入していくごく一般的な人を、対象ユーザーとする。
- ・販売定価¥1,500程度。
- ・温度計の針は重心が中心に来るようにデザインを行うこと。



(従来のシンワ測定の温湿度計)

●プロジェクトの進行

このプロジェクトの作業は、ほぼ夏期休暇期間中に行われた。夏期休暇に入る直前の7月末、シンワ測定の担当の方に会社及びプロジェクトの説明を行っていただき、その後は基本的に参加者各自が個別にデザイン案を出して、1～2週間に一度の割合で主査と学生とで、話し合いながら各自の案をつめていった。

途中で大学側と、シンワ測定サイドとの条件に対する認識のズレが明らかになることもあったが、何回か話し合いを重ねる中でお互いの認識をすりあわせて行った。

アイデアスケッチから各自複数案をラフモックアップ化した段階でシンワ測定の方を交えて実現性の検証などを行い、各自2～3案程度最終案を制作した。

以下の写真はプレゼンテーション風景である。



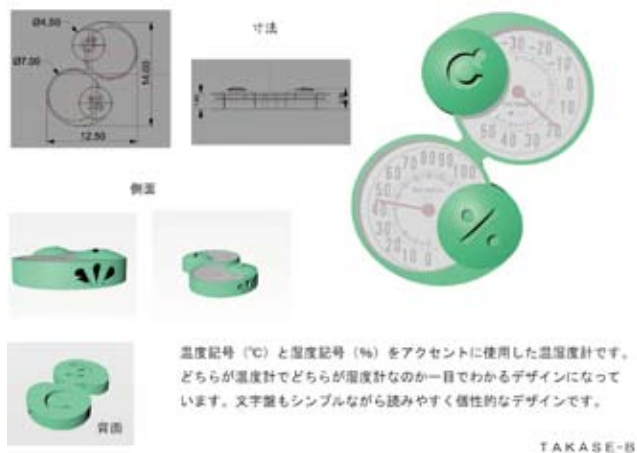
●デザイン案

17案ほど提案され、その内の主なものを以下にあげる。

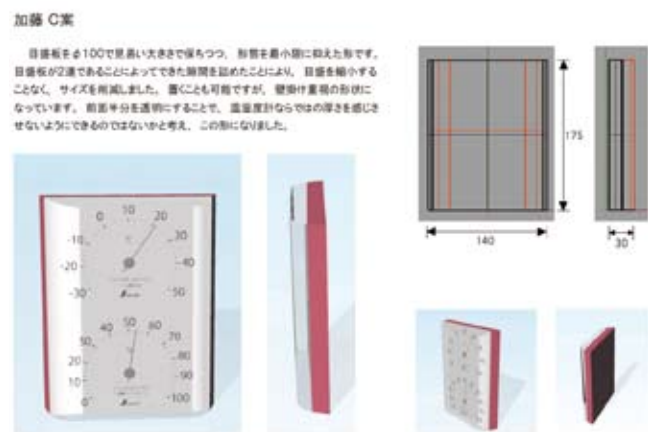
A



B



C



●商品化

最終案はシンワ測定が会社に持ち帰り、内部の検討を経た上で1案(左記C案)をベースにして2010年4月に商品化された。



●さいごに

最後の案の提示からまもなく本提案全てを内部評価したアンケートの結果をいただいた。その後、半年以上話がなかったのが、いきなり商品になって発売されたと聞いたときには驚いた。

最もオードドックなアイデアが選ばれたこと、コストダウンなどから前面の透明な樹脂の形状が変わったのは理解できるにしても、文字盤のレイアウトのバランスが悪いのは残念。商品化検討の段階で声をかけてくれていたらと思う。

しかし、学生提案が金型を要する樹脂成型の商品に結びつくというのは、極めて異例のことであり、貴重な機会を与えてくださったシンワ測定様には深くお礼を申し上げたい。

委託事業名：

上着掛け付スラックスハンガーデザイン提案業務

発注者：ニイガタ機械株式会社

受託期間：平成21年11月19日～平成21年12月18日

プロジェクト主査：土田知也（プロダクトデザイン学科 教授）

●概要

従来のハンガーでは下の写真の様に、一旦上着をかけてしまうとスラックスは非常にかけづらい。しかし、普通は上着を脱いでからスラックスを脱ぐため、脱ぐ順番とかけ易い順番の齟齬が生じている。

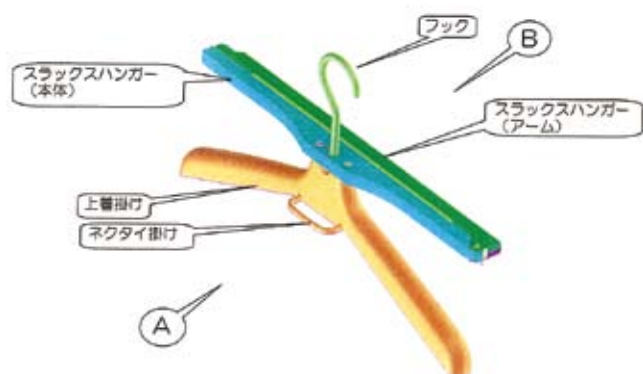


本提案のポイントは、自然に脱いだ順に服をかけられるハンガーという点にある。この業務では基本的な考え方・構想は決まっていたため（特許申請済み）、いかに造形的に使いやすく、魅力的なものにするかが課題であった。

その他の与条件としては、主要なパーツは全て樹脂で作ることが条件となった。

●デザイン案

当初ニイガタ機械から提示された案は以下の通りであったが、スラックスをかける部分と上着をかける部分とを一体的に扱ったことで、人が両手を広げ、足を広げているような特徴的な形態であった。



そこで両者を形態的に完全に分離し、スラックスハンガー部の水平方向の流れと上着をかける部分の弓なりの流れが、お互いに独立した構成とした。（下図）



本案はその後、3次元造型機でプロトタイプ化されIDSなどで展示された。

受託事業名：

長岡市都市景観賞銘板制作（複製）業務

発注者：長岡市

受託期間：平成21年 8月20日～平成21年12月28日

プロジェクト主査：長谷川克義（美術・工芸学科 准教授）

プロジェクトメンバー：高橋麻里（工房職員）、五十嵐文音（工房職員）

●受託概要

本件は、長岡市が市民に良好な景観について考え、関心を高めることを目的として、平成15年度から創設された「長岡市都市景観賞」の銘板および楯を鋳物で制作するものである。この景観賞は3年毎にあり、今回で3回目である。今年度の受賞は、秋山孝ポスター美術館、高野家住宅と積邨ギャラリー飛蟲舎、株式会社米百俵本舗、ソリマチ株式会社新潟本社、小国地域フラワーロード推進協議会の活動、馬高・三十稲場遺跡保存会の活動であった。

デザインは工芸デザインコース前任教授のもので、銘板および楯のシリコン雌型から、銘板4点、楯2点の制作を行った(楯の支持体となる木枠およびプレート部分も制作)。



シリコン雌型から蠟原型を起こしている状況

●制作条件

本業務の条件として、以下のことが挙げられた。

- ・第1回、第2回と同じ形式、色とする。
- ・楯の支持体となる木枠については特に規定はない。

この条件を踏まえて、シリコン雌型から蠟による原型を起し、石膏埋没鋳型による鋳造を行い制作した。



楯の修正中蠟原型とシリコン雌型

●制作工程および日程

(1) シリコン雌型の確認（8月）

シリコンによる雌型を保存していたが、その状況が悪く、かなり「へたり」「歪み」が起きていること、また、スペル間違い、受賞年度について数字の修正を行わなくてはならないことを確認する。

(2) 蠟取り・湯道方案（9月初旬～中旬）

先ず、シリコン雌型から蠟原型を制作する。前述の「へたり」「歪み」部分の補正、受賞年度や英文字部のスペルの修正を行う。

蠟の配合は、

肌打ち 松脂 1：マイクロ 2：パラフィン 1

裏打ち 松脂 1：マイクロ 1：パラフィン 8

とする。

銘板取付時の仕組みを考慮すると同時に、鋳造に於ける金属の流路を考え原型と同様に蠟で取り付ける。

(3) 鋳型制作・鋳造（9月下旬～11月初旬）



湯道の取付状況



鋳型の制作状況



鋳込の状況



塗色の状況



完成した銘板および楯

石膏埋没鋳造による鋳型を作成し、窯内にて脱蠟、焼成を行い、ブロンズにて鋳造する。

工場の都合上、3回に分けて鋳造する。

(4) 仕上・表面処理（10月～12月中旬）

鋳造したものを鋳流え、仕上加工を行う。

(5) 木枠、プレート作成（12月上旬～中旬）

楯用木枠およびプレートを制作する。

木枠については第1回のデザインを使い、制作を行う。また、プレートは真鍮板にシルクスクリーンにて文字を摺り入れる。

(6) 着色（12月下旬）

緑青により全体に色付けし、顔料により塗色する。

(7) 受渡（12月26日）

楯を木枠に固定、プレートを取り付け、長岡市に受け渡す。

●まとめ

寸 法 ：銘板 H315×W315×D35mm
 楯 H250×W210×D87mm(木枠含)
材 質 ：ブロンズ <BC-6>
楯木枠 ：タモ
楯プレート：真鍮板（t = 1mm）

シリコン雌型の劣化が今回の業務で発覚した。このような複製を基とした業務では、これまでの経緯等をより理解しないとうまく作業が進まない。今後の検討としなければならないであろう。

最後になるが、鋳金工房職員の高橋麻里、テキスタイル工房職員の五十嵐文音に協力を仰いだ。感謝する次第である。

受託事業名：

長岡防災シビックコア地区サイン策定業務

発注者：長岡市

受託期間：平成21年5月8日～平成22年3月31日

プロジェクト主査：吉川賢一郎（視覚デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：澤田雅浩（建築・環境デザイン学科 准教授）、平井邦彦（建築・環境デザイン学科 教授）、矢尾板和宣（研究員）

●概要

長岡防災シビックコア地区は、長岡市の中心市街地における唯一つの大規模空地（南操場跡地）という特性を生かしながら、新潟中越地震の被災を教訓として「長岡地域の防災性の向上と快適な都市生活を支える広域拠点の形成」を整備目標に計画が進められており、この地区らしさのあるサイン計画を求められた。なお、ここに記載された内容は、提出された報告書のほんの一部を抜粋したものである。

●ターゲット

この地区の特性を考慮すると、平常時と非常時（大規模災害発生直後の応急対応期）によって、想定利用者が若干異なると考えられ、平常時には公園を中心とするエリアと官庁エリアでも利用者が異なることが予想される。

[平常時の利用者]

家族連れや児童・生徒など長岡市民防災公園一般利用者、緑への関心が高い、緑花センターや花の広場の一般利用者、小さい子供を持つ家庭で、全天候型子育て支援施設の一般利用者、公共施設利用者、小学生、保育園児等の消防庁舎見学者、通勤通学や散歩などの近隣の住民

[災害時]

一時避難者とその後の避難生活者、行政による災害対応関係者、救助救援関係者（周辺部からの応援部隊、各種ボランティア）、復旧関係者（事業者等含む）

●サインの種類

[案内サイン]

施設案内図（防災シビックコア地区の施設案内）

周辺案内図（防災シビックコア地区の周辺案内）

[誘導サイン]

歩行者誘導サイン

車両誘導サイン（長岡市のサインマニュアルに沿った誘導サイン）

●サインの位置

平常時と災害発生時を想定した動線を考慮し、この

地区を訪れた人たちが最初に踏み入れる場所や複数の動線が交わる地点にサインを計画した。サインの乱立を避け、できるだけ少ない設置数で効率よく案内誘導ができるよう配慮した。設置場所や設置する数については、照明・植栽・地下埋設物・災害時用トイレ・災害時用給水施設とサインとの関係を調査し決定した。

●デザインコンセプト

キーワード： 防災とデザイン

キービジュアル： 樹木

キーカラー： 樹木を表す茶色と緑色

テーマ： 楽しい木のサイン

デザインコンセプト1：

災害時の利便性を考慮したデザイン

[形そのものが情報となる]

誰もが一言で“木”と簡単に言い表せるようなデザインを検討した。それによって「サインの形そのもの」が意味を持ち、情報となって容易に説明することが出来るため、待ち合わせ場所や目印として機能させることができる。

例. アサヒビール本社ビル、渋谷駅ハチ公前広場

大規模災害発生直後の応急対応期に、利用者にとって必要な情報を提供できる機能や使いやすさを検討した。また、避難している人々の心理状態を配慮した上で、サイン本体に「楽しさ」の要素を反映させている。

デザインコンセプト2：

シビックコア地区を認識させるためのデザイン

[市民または新幹線を利用する不特定多数の人々にこの地区を認識させる役割]

防災シビックコア地区は立地の特性から、市民だけでなく、新幹線に乗車中の人にとってもその存在を目視することができる。

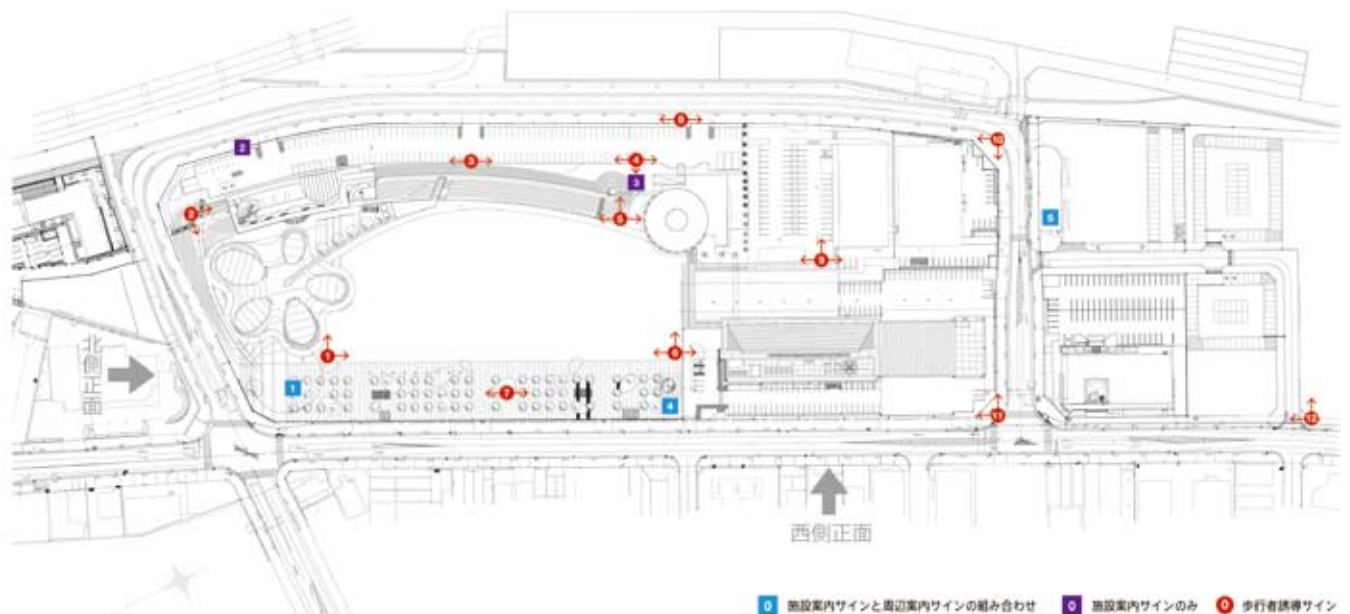
防災シビックコア地区にわかりやすい記号性を有するサインを配置することで、これらの人に対し明解に印象づけることができ、誰もが簡単に形を言い表せるサイン＝形がアイキャッチとなることはこの地区を認識

させる大きな役割を担うこととなる。

●表示面情報のデザイン方針

- ・多様な情報を様々な人達に分かりやすく提供できるよう、サインごとに利用者との距離を勘案し、文字や絵記号（ピクトグラム）の大きさ、色相や色の組み合わせ、色の明度差に配慮した。
- ・絵記号は情報の誤解が生まれないよう、国土交通省監修による標準案内図記号、並びに日本規格協会の「案内用図記号 JISZ8210」を使用した。当地区の表示面情報には、概念・意味が一見して判読が難しくなることが予想されるため施設等が有するシンボルマークやロゴタイプなどを表記しないこととする。
- ・案内サインの地図の範囲は、地区の地図と半径1km～3km以内の周辺地図を表示した。その理由は一時避難所として利用される大規模災害発生直後は、JR長岡駅前の中心市街地などからもこの地区に避難することが予想されるからである。
- ・この地区の特性として新幹線の高架が常に視界に入るため、地図上に新幹線の軌道を示し、施設案内図の向きを位置によって変えることで現在地が分かりやすくなる工夫を行った。
- ・通常使用できる施設のトイレの情報も地図に加えた。
- ・災害時仮設トイレの設置場所や災害時給水施設、シビックコア地区周辺の避難所など、災害時に役立つ情報を平常時の情報と混乱しないように地図に加えた。
- ・施設案内図と周辺案内図はサイン本体の裏側を掲示板として利用できる機能を想定した。また、これらのサイン本体には個体番号と現在位置を示す経度と緯度を情報として掲載することとした。災害時に、シビックコア地区の正確な位置を伝えるために世界測地系の経緯度がサインに付記されていることによってナビゲーションシステムでの場所の確認が容易となり、外部からの支援車輛等の現地到着がスムーズとなる可能性がある。

●サインの位置と種類



●シビックコア地区のサインにおけるユニバーサルデザイン

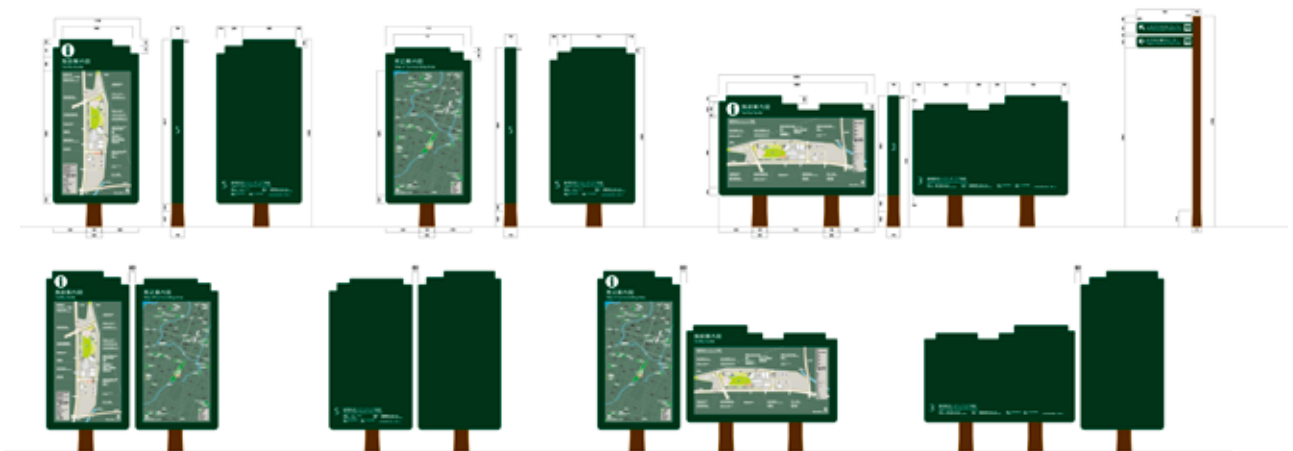
近年では「バリアフリーデザイン」デザインにかわって「ユニバーサルデザイン」という、できる限り利用しやすい製品や建物、空間をデザインすることを意味する言葉が用いられるようになってきた。シビックコア地区のサインにおいても、いかなる場合にも的確に情報を伝えるために必要な考え方であると言えるだろう。一方で、すべての人を想定した機能を持つサインを実現することは難しいとされている。厚生労働省の平成18年度身体障害者総数（平成20年発表）によると、障害者の約半数が車いすを必要とする肢体不自由障害者である。そこで、この地区のサインは主に車いすを使用する人と※色弱者や視力の低下した高齢者に配慮したデザイン検討した。車いすを使用する人には視線の配慮を、※色弱者や視力の低下した高齢者には色彩や情報の大きさを配慮した。

※色弱者＝一般色覚者に対し、社会が対応するまでの期間「弱者」の立場に置かれることから、色彩コミュニケーションの弱者という意味で「色弱者」と表現している。色弱者に関しては、人間にはC型（一般色覚）・T型とA型（少数）P型とD型（T型とA型より多数）と呼ばれる5種類の色覚タイプがある。そのうち、赤と緑の違いが見分けにくいP型（赤を感知するL錐体の特性が異なる人）とD型（緑を感知するL錐体の特性が異なる人）に配慮し色彩を検討した。

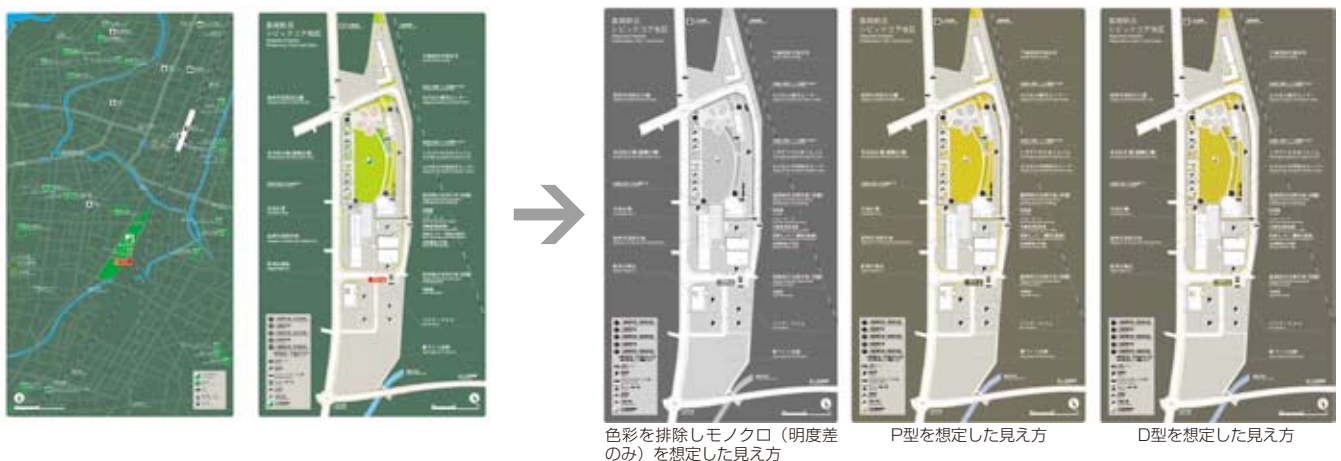
●色彩について

サイン本体の色彩は、地区の景観に溶け込むよう配慮し色彩を選定した。ただし、サインであることを認識させることも重要であるため、景観に溶け込み過ぎぬように本体のフォルムにアクセントを付け配慮した。様々な情報を視覚化するには、色相差で違いを出すのではなく、明度差を生かして色彩を選定した。

●サインの種類（上）とサイン組み合わせ例（下）



●周辺案内図と施設案内図と色弱者・視力の低下した高齢者の視点を想定したシミュレーション



● 人とサインの位置関係

歩行者が移動しながらサインを視認できる距離
(前方 5m に他の歩行者がいる場合)

視点の高さ：床面より 1560mm

前方の通行者の位置
平均身長：1680mm

前方 5m にいる人に
遮蔽されない下限界線

2400mm

15m

Scale=1/130

仰角 10° の上限界線

車いす使用者が移動しながらサインを視認できる距離
(前方 5m に他の歩行者がいる場合)

視点の高さ：床面より 1175mm

前方の通行者の位置
平均身長：1680mm

前方 5m にいる人に
遮蔽されない下限界線

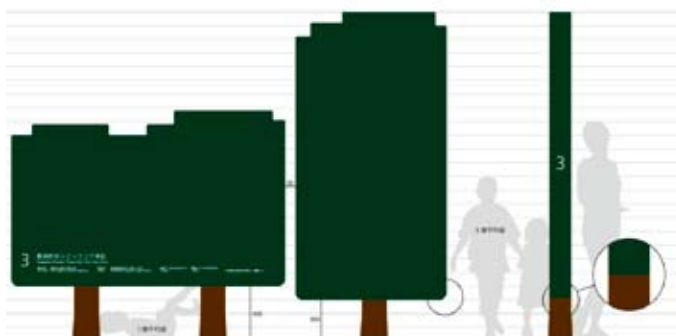
2400mm

15m

Scale=1/130

仰角 10° の上限界線

サインは本来遊具ではないが、この地区のサインには「楽しさ」をデザインに反映させているため、公園や全天候型子育て支援施設の一般利用者（特に小さな子供たち）が、遊具のようにサイン本体と接することが想定される。国土交通省「都市における遊具の安全確保に関する指針（改訂版）」と社団法人日本公園施設業協会「遊具の安全に関する基準JPFA-S：2008」を参考に、サイン本体のデザインを遊具という観点からも検討した。



- 13

長岡技術科学大学CIデザイン制作に係る監修業務

発注者：国立大学法人長岡技術科学大学

受託期間：平成21年6月1日～平成21年9月11日

プロジェクト主査：福田毅（視覚デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：サイン計画／福田毅、大間猛

看板・アプリケーションデザイン／大間猛

看板施工業者／三浦正昌（橘工芸）

1. はじめに

本来、大学にはマークというものが存在するはずであるが、この長岡技術科学大学（以下、技大）には存在していなかった。今までは国立の技術大学ということ、そして国からの助成金もあって、「マークが存在しない」という問題自体、運営には大きく影響していなかったようである。

しかしここに来て、少子化が進み、大学の競争が一段と厳しくなっていく中であって、国立大学も各々法人化が進む傾向にある。独立し運営するにあたり重要である、マークを含めたC I（コーポレートアイデンティティ）で企業イメージの視覚統一を実現することが、今回の受託業務の内容である。

2. C Iにおけるマークデザインの開発基準

C Iを開発する際、新たなマークが周りの人々に同じイメージで共有されるために（図1）、また、最良のイメージを伝達し世に羽ばたいていくために考慮すべき基準が存在する。イメージ上（目で見た時に得られる印象）の基準と機能上（実際に使用した時の使い勝手）の基準、この両方をクリアしてこそ、良いC Iと呼べるのである。代表的な基準には、次に述べるものがある。

■イメージ上の開発基準

- ・信頼性（大学としての信頼性を感じとれるか）
- ・親近感（誰からも愛され、身近な存在として受け入れられやすいか）
- ・国際性（グローバル化にともない、世界中の競争にも打ち勝てるか）
- ・先進性（常に時代の一步先を行き、時代に即しているか）
- ・期待感（今までと違う新しさにドキドキさせられるか）

■機能上の開発基準

- ・独自性（オリジナルで他にない個性を秘め唯一無二のものか）
- ・視認性（さまざまな環境においても識別しやすいか）
- ・記憶性（覚えられやすいか）
- ・展開性（アプリケーションに展開しやすいか）
- ・永続性（色褪せず、長く使えるデザインか、即ち飽きさせないか）
- ・再現性（想定される媒体に正しく表示できるか）

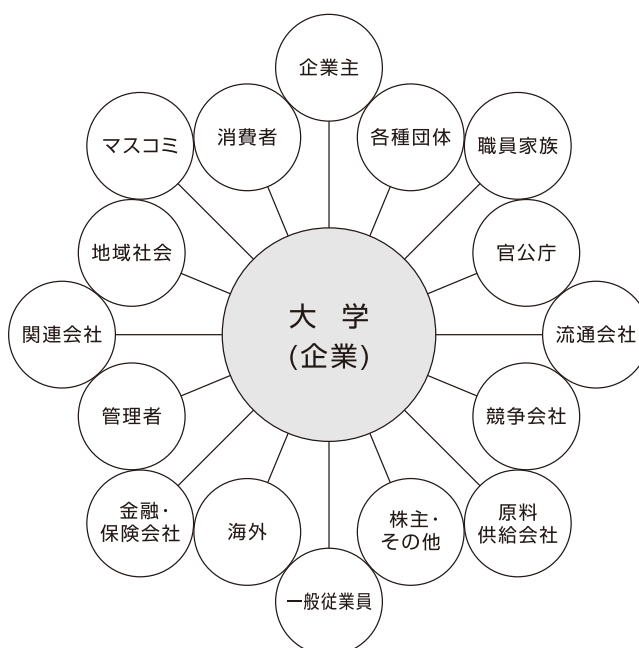
そして開発するマークのデザインに関しては、大学が持っている思想、理念や長岡技術科学大学という名称を軸にして、大きく分けて3通りの切り口が考えられる。今回は、それぞれの切り口より発想できるデザイン案をとにかく数多く作成し、その中から段階を踏んで絞り込んでいき、最終的な1案を導く方法をとった。

図1：

CI作成の主旨

●大学（企業）イメージの統一

学校を取り巻くすべての人々が同じイメージを共有するという最も大切な役割を担っています。



1. 技大は経営理念「VOS」(V=Vitality〈活力〉、O=Originality〈独創性〉、S=Services〈世のための奉仕〉)をモットーに国際的に活躍できる技術者の養成を目的としている。この事から50案程のマークデザインを導く作業をする。

2. 長岡技術科学大学／Nagaoka University of Technologyという大学名の英語表記の頭文字N.U.Tから考えられるマークデザインをまた70案以上作成する。

3. 長岡／NAGAOKAの頭文字であるNから考えられるマークデザインを70案程作成する。

3. プレゼンテーション

今回のプレゼンテーションに関しては、一方的にこちらから提示・決定するやり方ではなく、学生や教授の意見を取り入れながら進めていく形をとった。

第一回目は200案近いプレゼンテーションを行った。200案のデザインを学生と教員一同の投票のもとに2週間の期間を設けて100案程に絞り込み、修正を加え、第二回目に臨み、50案程に絞り込む。

第三回目に関しては5人のC I 委員会で20～30案を選び、その中から選んだ16案(図2)に関して、類似するものが存在しているかどうか調査を一ヶ月かけて行い、残った数案を改めて「イメージ上の開発基準」



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学



長岡技術科学大学

図2：第3回プレゼンテーションで最終選考に残ったロゴマーク案

と「機能上の開発基準」と照らし合わせて慎重に検証していき、下記のオリジナリティのある1案（図3）が長岡技術科学大学に最もふさわしいものとして選ばれた。

このマークは常にしなやかで、しかも時代に敏感な鋭い発想を持ち、愛情と情熱を持って地球環境を考える大学を表現している。Nagaokaの「N」がモチーフである。鋭くしなやかに天に伸びている爽やかな「青」い色は環境を表現し、それを包み込んでいる「赤」は、常に地球環境のすべてを愛情と情熱を持って考える大学であることを表現している。

このようなC I制作の際には、様々な視点からの考

慮が必要になる。どれか一つでも欠けていれば、できあがったC Iは最良の結果を発揮しないのである。

4. アプリケーションへの反映

ロゴの完成と同時に、大学のアプリケーションへの落とし込みの作業が始まった。C I発表の会見で新原皓一学長が「世界へはばたいていく大学にふさわしいロゴができた」と説明していた通り、完成したロゴは名刺・封筒・看板などあらゆるものに記載されて、一新された大学のイメージは次々と世界へ向けて広がっていくのである。

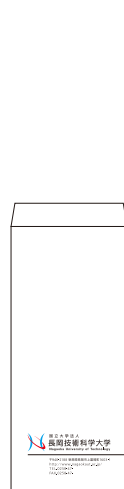
図3：決定案



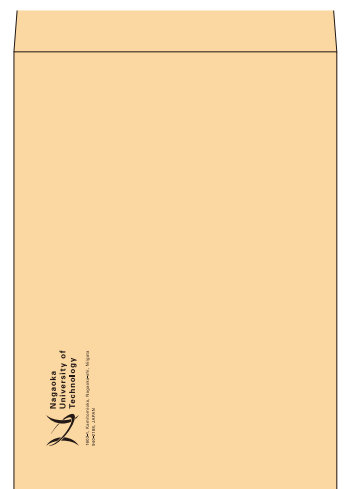


1

2



3



4



5

図4：
アプリケーション（一例）
1. 名刺（表・裏）
2. エアメール封筒
3. 長4・長3・角2号封筒
4. ひも・マチ付封筒
5. 大学入口サイン

受託事業名：

ながおか市民防災センター内 全天候型施設「ぐんぐん」 サイン・ロゴ・パンフレット等デザイン制作業務

発注者：長岡市（教育委員会 子ども家庭課）

受託期間：平成21年11月8日～平成22年3月31日

プロジェクト主査：福田 毅（視覚デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：サイン計画・デザイン／大間 猛、宮野 亮、清水辰徳

ロゴマークデザイン／福田 毅、大間 猛

看板・パンフレットデザイン／大間 猛

1. はじめに

長岡駅から徒歩10分、広大な防災公園の敷地内にある「ながおか市民防災センター」。その建物の1階に子育て支援施設「こそだてのえき ぐんぐん」がオープンすることに伴い、施設のロゴマークやサインシステムの構築とそのデザインの制作を行った。

これらの制作にあたり、まず考えたのは親子の交流の場であること。そして親同士や子ども同士でも楽しく遊べる場であること。それを前提としてデザインをイメージした際に、「絵本のような世界が目の前にあれば、親子みんなで楽しめるはずだ」という考えに至った。

2. 犬の家族を用いたロゴマーク・サイン

シンプルで覚えやすい、この「こそだてのえき ぐんぐん」というネーミングは、子どもたちがすこやかに伸び伸びと「ぐんぐん」育ってほしい、明るく楽しいコミュニケーションの輪が「ぐんぐん」広がってほしいという市民の多くの願いで決定されたものである。そうした事も踏まえつつ、出来るだけ多くの人たちに愛されることを目指して、「犬の家族」のキャラクターを施設のシンボルとしマーク・サインのデザインに展開していくことに決めた。

「ぐんぐん」に行けば楽しいサインたちが待っている、というイメージのもと、ロゴマークにはこれから

図1：ロゴマーク



図2：各コーナーサインキャラクター



①おえかきひろば



②えほんひろば



③ふれあいひろば



④交流ひろば



⑤あかちゃんひろば



⑥じゅにゆうしつ



⑦おもつかえしつ



⑧おとこのこのといれ



⑨おんなのこのといれ

「ぐんぐん」に向かう犬の家族を描いた（図1）。施設のメインコーナーのサインには、ロゴマークで使った犬の家族を軸として、それぞれのコーナーの目的に沿った家族のシチュエーションを描き、一目でどんなコーナーか判るようにした（図2）。また、従来トイレや授乳室などのサインにはピクトグラムを用いることが多いが、世界観を統一するため、オリジナルのサインの作成を決めた。文字やピクトグラムだけで構成された、無機質なサインよりも、とても楽しく、また施設自体が元気に見えるという確信のもと、制作を進行していった。おそらく、子どもたちにとっても、「犬の家族がいる遊び場」として記憶に残るはずである。

サインの表現の仕方を変えるだけでも、施設の持つイメージは大きく変化し、親しみやすさが生まれるのである。

3. 機能性を考えたサイン

施設名の由来である「ぐんぐん成長する」「ぐんぐん積み上げる」といった言葉から、サイン計画の造形・形・フォルムのコンセプトを積木のイメージとし、その象徴として施設入口には積木型サインを設置した（図3〈下〉・4）。

そして、施設のメインコーナーとなる「ひろば」は、①おえかきや工作など創作の場である「おえかきひろ

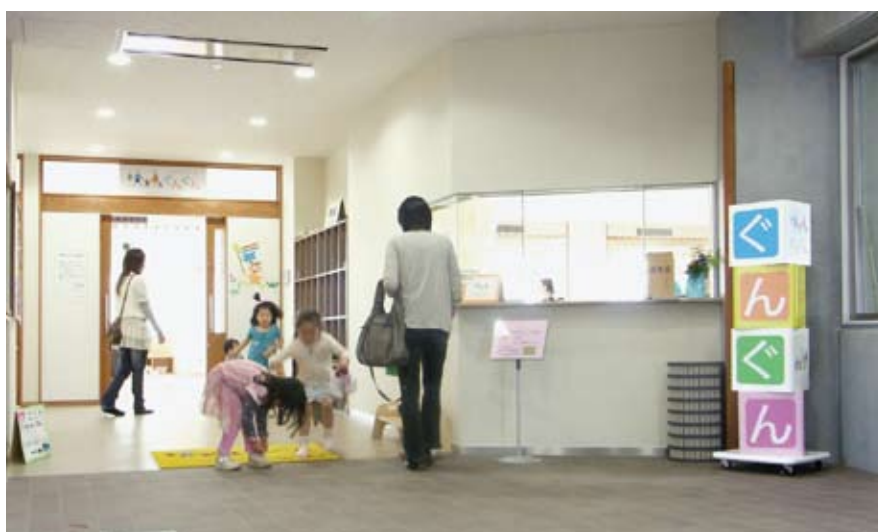


図3：〈上〉屋外館名サイン 〈下〉施設エントランス



図4：積木型移動式 施設名サイン

ば」、②親子で読書を楽しむ「えほんひろば」、③おもちゃで遊んだり、様々な世代が交流する「ふれあいひろば」、④お弁当を食べたり、お茶を飲んだり、ゆっくり休憩のできる「交流ひろば」、⑤ハイハイまでのあかちゃんも安心して楽しめる「あかちゃんひろば」と、目的の異なった5つのエリアがあり、パーテーションなどの仕切りがなく、それぞれのエリアを簡単に行き来出来るようになっている。そこで考えたのは、コンセプトである「積木」のフォルムを感じさせる“キューブ型”（図5）という独特なサイン形態を用い、その形態の特性を活かしつつ、「わかりやすく、有機的なデザイン」を目指して制作を行った。

4. キューブ型サインとその特性

前述にある5つのコーナーには、「犬の家族」のイラストと、コーナーの名称を記した「キューブ型エリア表示サイン」として設置した。

サイズに関しては「大きすぎると室内に圧迫感を生む」「小さすぎてもサインとして成り立たない」ということから350mm四方の立方体に決定した。

素材に関しては「ぶつかっても怪我をしない」「簡単に移動したり投げたりできないようにする」ということを目的に、ポリエチレンよりも柔らかく弾力があり、適度な重量・無公害のEVA（エチレン-酢酸ビニル共重合樹脂）を使用することにより、様々な状況で



図5：キューブ型エリア表示サイン



図6：キューブ型エリア表示サインの特性を活かした使い方

このキューブ型エリア表示サインは、斬新なアイデアが評価され、社団法人日本サインデザイン協会が主催する「第44回SDA賞（2010年）」の「公共サイン（システムサイン）部門」で見事「入選」を果たす事ができました。
SDA賞・・・優れたサインデザイン作品を広く社会にアピールし、サインデザインの普及および啓発を目的とする、日本で唯一のサインデザインに関する顕彰事業。

の適応性・安全性を実現している。

そしてサインの形態を正方形の「キューブ型」という形にこだわった理由として、主に次の3つがある。

1. 自立式

壁に直接貼付けないので建物自体を傷めない（跡を残さない）。設置工事がいらない。

2. 移動式

施設内の運営方法の変更や模様替え、エリアの移動にも対応できる。

3. スタッキング式

不必要な時はバックスペースや物置きなどに収納できる。（場所を取らず、コンパクトに収めることができる）

上記のように施設利用者だけでなく、管理者、そして施設自体への考慮を踏まえた、機能的なデザインを心掛けて制作を行った。

また、前述でもあるように、施設のメインコーナーには、受付から全体を見渡せられるように、それぞれの「ひろば」の間に壁を設けていない。一見エリアの住み分けが無いようにも見える。そこでこどもが頻繁

に出入りするエリアには、同一のキューブ型エリア表示サインを2個設置し、その使い方によってエリアを見分けやすくなるように配慮した。主な使い方に（図6）がある。二通りの設置方法を利用すれば、意図的にサインとして主張・制御したり、またその逆に主張しなかったりと、自由に変化しながら使用できる、施設の様々な状況・目的にも対応できるデザインになっている。

5. 仕掛けのあるパンフレット

絵本のような表紙のパンフレット（図7・8）を開くと、飛び出す絵本の仕掛けのように、キューブ型エリア表示サインがくり抜かれている。実際のものに似せて、「おえかきひろば」「えほんひろば」「ふれあいひろば」「交流ひろば」「あかちゃんひろば」のキューブ型サインが飛び出してくるという仕掛けで、デザインされている（図9）。

サインだけでは無く、パンフレットにも（コンセプトに沿った形で）楽しい仕掛けをすることで、利用者の楽しみも、また一つ増える。そして一番大切なのは、楽しみながらデザインをすることであり、その気持ちは利用者へ伝わるのだと信じている。



図7：パンフレット表紙

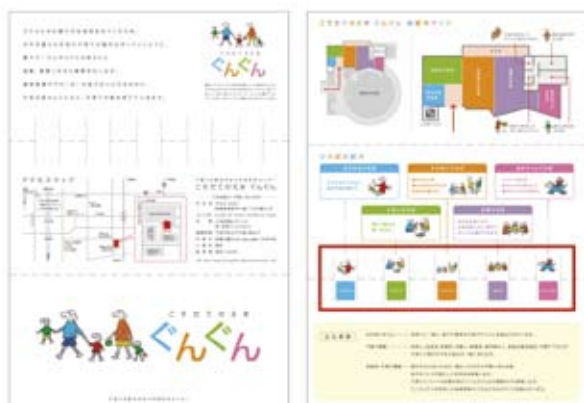


図8：パンフレット展開図（赤線の囲みが仕掛け部分）



図9：パンフレット仕掛け部分…実物と同じようにサインが立体になる。

0. 業務の概要

本業務は、昨年度受託した「西部丘陵東地区環境共生アドバイザー業務委託」の継続業務として、「環境共生」の具体的なデザインや設計への指針を示すことを目的としたものである。また2009年11月19日に行われた市民フォーラム「みらいコラボ長岡'09」への参加、ならびに企業誘致のためのガイドブックにおける環境共生と緑化に関するコンセプトの取りまとめを行った。

以下に本業務の要点を記載する。

1. 緑地計画の理念と配置計画

立地環境、および過去と現在の植生・地形の状況を把握した上で、以下に示すような緑地計画の理念を設定する。

1-1 縄文時代から続く「里山環境」の創造

西部丘陵東地区のすぐ北側には馬高遺跡、三十稲場遺跡という縄文遺跡があり、縄文時代からこの場所は生活のバックグラウンドとなる森として存在していた。その後も、敷地内には地域の「鎮守の森」でもある六座神社が建立され、現在も大事に維持管理されているように、古来より継続的に生活に密着した森として存在してきた。このように、六座神社の森を含むこの土地は、地域の人々にとって精神的なシンボルであるとともに、緑地・地形といった土地の記憶を残す場でもある。

本計画においては、これらの土地の記憶を重視し、現況に配慮した企業立地と生活に密着した現代の「里山」環境の創造を目指す。

1-2 周辺の「里山」をつなぐ連続した緑地配置計画

立地環境でも確認したとおり、本計画地は西山丘陵の東側端部に位置し、周辺の緑地としては馬高・三十稲場遺跡、国営越後丘陵公園、雪国植物園などがあり、信濃川へと続く大きな緑地環境の流れの中に位置づけられる。また計画地に接して六座神社があり、計画地内の外周にも既存緑地が保全されている。

西部丘陵東地区における緑地配置は、以上の周辺条件を十分生かし、六座神社の森に隣接したビオトープ公園、そこから連続する中央緑地と斜面緑地を緑地配置の骨格として位置づける。そして本計画におけるこ

れらの緑地が周辺の「里山」から西山丘陵の広域まで連続するように繋ぐことにより、里山の生物棲息環境も連続することになる。

1-3 「里山」を維持する持続可能な緑地構成と管理プログラム

生態学的に見ると、「里山」とは人手が入ることによって維持されてきた多様な生物の棲息環境である。長岡市の都市としての生活環境が変化してきた現在、里山を維持することは、農業的、生活的にその必要性は無いといって良い。しかし、里山の持つ生物多様性や、都市住民にとっての環境的・景観的位置づけなどその現代的存在意義は大きく、周辺地域の自然、文化的財産として維持管理していくことは、長岡市にとっても大きな財産となる。

以上のような理念のもとに、長岡市、進出企業、地域住民などが一体となって「里山環境」を維持するための作業を協働で行うこととする。「里山環境」は適度な管理が必要であることから、例えば樹木の枝打ちや間伐を行うと同時に、野鳥観察、植物観察などの自然観察やキノコ探し教室を行うなど、楽しく管理できるようなプログラムを立案していく。

2. 環境共生と緑化の基本方針

2-1 緑化の基本方針

本計画の推進にあたっては、進出企業だけでなく地域の人々をはじめとした長岡市民、そしてそこに棲息する全ての生き物が快適に暮らせる環境創造を目指していくことを基本理念とする。そのために、図-1に示すような緑化の基本方針を設定する。

2-2 植栽基盤の確保

本計画地は造成された地盤であって、基本的に植栽用土（植栽基盤）として適切であるとは言い難い。早期樹林化を目指すためにも、まずは植栽に適した土壌の確保は不可欠である。一定の期間が経過した里山の土壌は表層10～30cm程度は有機質に富んだ森林土壌である。そしてそれが次の世代の実生や林床の草花の生育基盤となり、さらに微生物を含む多様な動物相を形成している。

① 本来の生物棲息環境を構成する



参考となる雪国植物園の植生環境

② 造成は極力自然な形態に整形する



通常の造成パターン
直線的に造成されることが多い

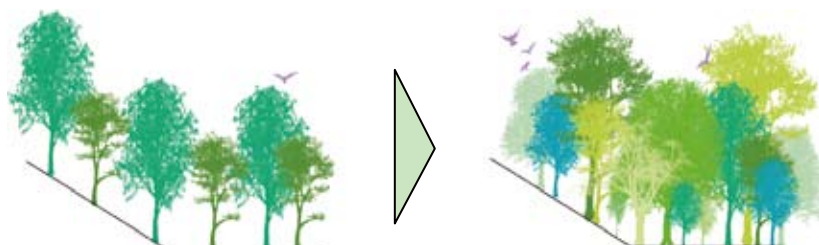
自然地形を目指した造成パターン
里山の一部としての自然地形を再現する

③ 樹林構成は本地域の里山環境を構成するものとする



里山環境を形成する樹林構成は樹種の多様性が重要
潜在自然植生をベースにして、本地域における里山環境の樹種構成とする。
道路沿いや企業用地沿いは景観にも配慮する。

④ 「異齢林」による自然の力を生かした緑化手法を取り入れる

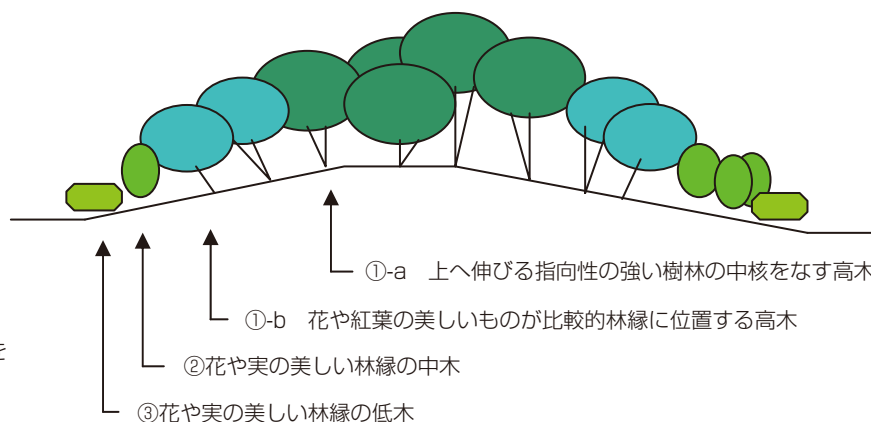


通常の植栽パターン
樹種毎に同じサイズの樹木が植栽されることが多い。

「異齢林」の植栽パターン
多様な樹種で、かつ異なるサイズによる多層林を構成する。

図－１ 緑化の基本方針

図-2 樹林の基本構成
(中央緑地、企業用地外周緑地を
モデルとして)



以上のような土壌を早期に生成させることはなかなか困難であるが、市の街路樹や公園管理から発生する剪定枝・葉のチップを堆肥化したものを、植栽前に全面散布し混入することによって、植栽基盤としての土壌改良を行う。

2-3 樹林の基本構成

樹林の構成にあたっては、図-2に示すような断面構成を基本として植栽する。(本報告書においては各部に適した樹種のリストとその特性を示しているが本報では省略する)

2-4 植栽プログラム

基本方針に示したように、より適切な森林構成を目指しながら早期森林化を図るために、以下のようなプログラムにより植栽を推進する。

ステップ① 公共用地の骨格となる植栽実施(可能な限り早期着手)

100㎡当たり以下の本数の樹木を植栽する。

- ・ 樹林の中核をなす高木、林縁に位置する高木についてH2～3mクラスの樹木を1本
- ・ 同上の樹種の幼木(ポット苗2,3年生H1～2mクラス)を同じ範囲に植栽1本
- ・ 林縁の中木としてH1～2mクラス樹木を植栽2本
- ・ 同上の樹木の幼木(ポット苗2,3年生H1程度)を同じ範囲に4本
- ・ 低木の幼木(ポット苗2,3年生)を10本
- ・ クヌギ、コナラなどの実を秋に近隣の樹林より採取し適宜散布

・ 刈り払いした下草はそのままマルチングとして利用
ステップ② 企業用地の初期植栽実施(企業が決定しだい着手)

- ・ 進出企業とは緑地協定を締結し、契約後1年以内に外周緑化を義務づける
- ・ 植栽内容は公共用地の骨格植栽に同じ

ステップ③ 企業用地の修景植栽実施(建築工事完了後着手)

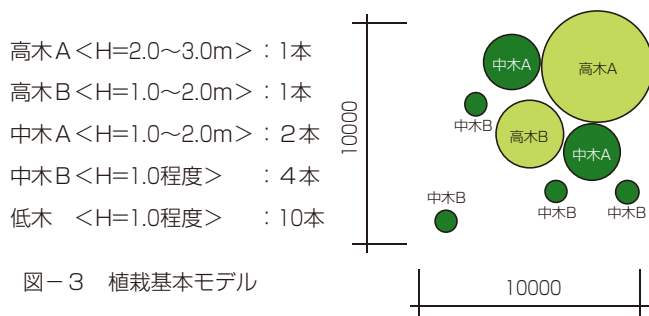
- ・ 進出企業の建築完了後、外周緑地以外の敷地内緑化を行う
- ・ 樹種は基本的に公共用地に同じであるが、花の美しいもの、紅葉の美しいものなどを重点的に植栽する

ステップ④ 公共用地、企業用地外周緑地の樹林調整(状況を見て判断)

- ・ 先行して植栽した樹木の枝払い、林床の整備、密度管理などを、樹林の生育状況を観察しながら実施する
- ・ 得られた剪定枝や間伐材はチップ化し、園路舗装材やマルチングとして極力現地にて使用する
- ・ 巣箱や餌台、水場の設置など、野鳥の誘致を図り、森林化促進を加速するようなプログラムを推進する。

表-1 スケジュールの概念

	基盤整備事業	企業進出決定後	建築工事完了後	将来の維持管理
市(事業者)	①公園・緑地など個各区となる公共用地の植栽実施			④公共用地、企業用地外周緑地の樹林調整
進出企業		②企業用地の初期植栽実施	③企業用地の修景植栽実施	



3. 企業敷地内の緑化ガイドライン

3-1 緑地面積と配置（案）

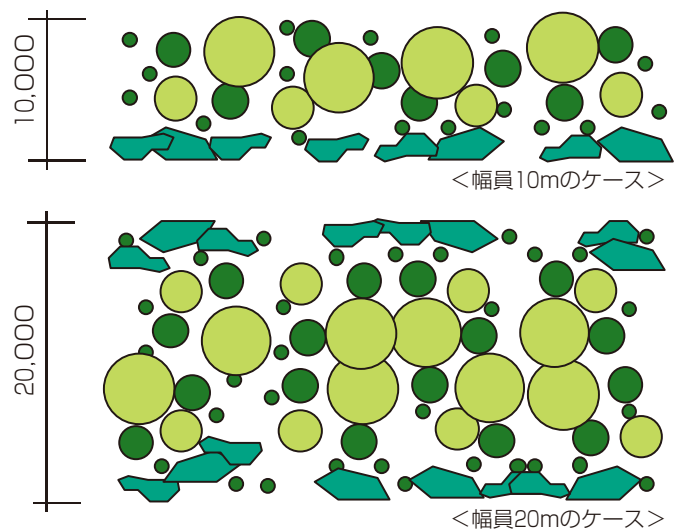
企業敷地の緑地面積とその配置案について以下のよう
 に提案した。

① 緑地の面積

敷地内の緑地面積は、工場立地法を基本として以下
 に示す面積とする。

緑地面積：敷地面積に対して25%以上

環境施設面積（緑地+緑地以外の環境施設）：敷地面
 積に対して20%以上



なお、緑地、環境施設の定義は工場立地法に基づく
 こととする。



図-5 計画地全体の緑化イメージ

② 緑地の配置

緑地の連続性や景観に配慮し、各企業用地における緑地は以下の基準を基本として配置する。

- ・ 前面道路側は緑地の幅員10m以上又は法肩まで。
- ・ 側面、背面は緑地の幅員 5 m以上。

なお、前面道路側緑地は建築根切り残土などを利用し、適度な築山を設け、周辺の山並みとの景観的調和を図ること。

3-2モデルプラン

植栽は単一の大きさのものではなく、樹齢の異なるものを植栽する「異齢林」の考え方を踏襲する。また単位当たりの配植をランダムにし、それを組み合わせて展開していく。図-3に10m*10m=100㎡当たりの植栽本数（基本モデル）、図-4にその展開例を示す。また計画地全体の緑化イメージを図-5に示す。

受託事業名：

吉ヶ平周辺施設整備に係わる企画デザイン業務

発注者：三条市経済部営業戦略室

受託期間：平成21年7月10日～平成22年2月26日

プロジェクト主査：上野裕治（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：新海俊一（建築・環境デザイン学科 准教授）、阿部将之（工房職員）

4年生：上野 浩、吉田聖生、真柄 学、近藤愛美

3年生：高橋左門、後藤正寛、田中洸太

0. はじめに

吉ヶ平は江戸時代から会津への重要な交易路「八十里越」の宿場町として、物資と情報の交流拠点であったが、新たな道路の開通や豪雪などの影響もあり、昭和45年に集団離村することとなった。それ以来、吉ヶ平を訪れる人は、旧住民の方々や守門岳への登山ルートの一つとして、あるいは戊辰戦争を偲ぶ「八十里越」散策の人など、ごく限られた人々のみが知る場所となっていた。

このような背景の中、旧下田村が三条市と合併するにあたり、新市建設計画搭載事業として挙げられていた「下田地域歴史街道整備事業」の見直しの中で、吉ヶ平整備事業は多様な観光資源を活用して観光振興を図るべく提案されることとなった。これを受けて、平成20年には地元住民や有識者7名からなる「吉ヶ平整備検討委員会」で5回の検討を行い様々な問題点を指摘してきたが、明快な将来展望を描くまでには至らなかった。

「吉ヶ平周辺整備事業企画デザイン業務」（以下本業務）は、以上のような経緯を踏まえて、吉ヶ平の今後の整備イメージを立案すべく長岡造形大学デザイン研究開発センターに委託されたものである。本業務の目的は、周辺と現地の現況調査を取りまとめた上で吉ヶ平の特性を把握し、事業コンセプト、実現可能な整備イメージと施設の概要、概算事業費とスケジュール、運営の方法などを立案することにある。

本業務が、今後の吉ヶ平の整備にあたって関係者全員が共有できるコンセプトや整備指針となるとともに、類似の離村集落整備の一つのモデルとなることを願っている。

1. 吉ヶ平の目指すべき方向性と基本コンセプト

現在では三条市の最も奥まった山間地となったこの場所には、豊かな自然が広がっている。現代の人のびとがこの自然から学ぶことは多く、都市部で生活する人々にとってこのような山間部は非日常的な空間であるといえる。昔の人々は当然のことに自然と共存して生活を送ってきたわけであるが、それは吉ヶ平に住んでいた人々も体験してきたことである。したがって、人と自然が共存することを目指していくとともに、歴

史ある吉ヶ平という場所の記憶を伝えていくことがこの場所における整備の目指すべき方向性であろう。

以上のような方向性から、基本コンセプトを「**自然豊かな記憶の場**」と設定した。電気もない、携帯も通じないこの場所であるが、周辺の豊かな自然の中で日常生活から離れて過ごすということは本当の意味での自然体験となるし、それは子供達の自然環境学習の場としてもっとも有効な場所となる。また吉ヶ平の住民だった人達がまだ元気に活躍している現在、集落の記憶を住んでいた人達だけではなく子供達にまでつないでいくことが今求められている。

2. 施設内容

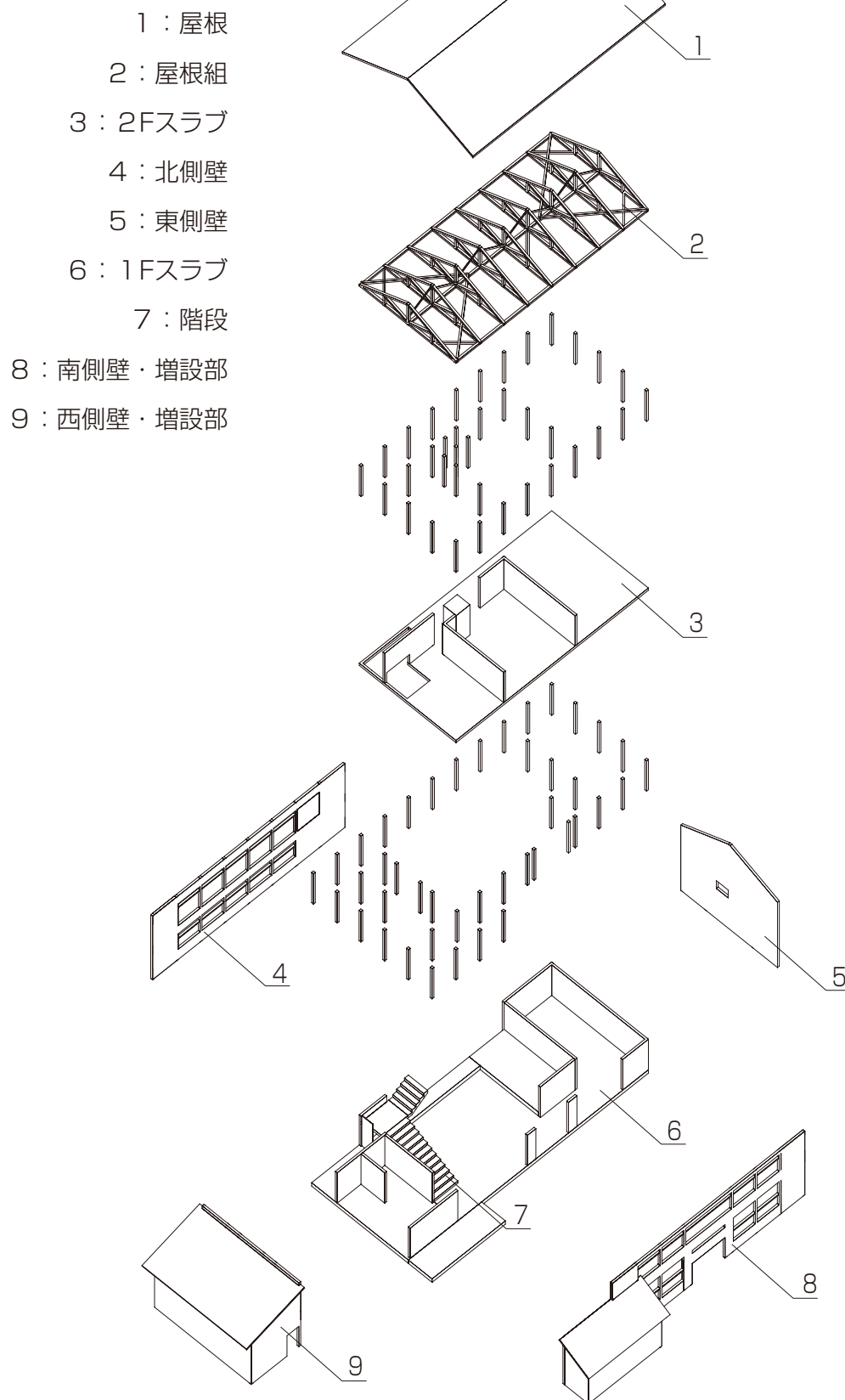
記憶の継承の場として小学校分校校舎を保全し活用していくが、建物がかなり老朽化しているため今後十分に調査をした上でリフォームしていくこととする。本業務では、今後のリフォーム設計に備えて建物の実測調査を行い、平面図、立面図とともに、図-1に示すような構造を含めたアクソメ図を作成した。

また施設構成は自然豊かな環境を壊さないように最小限の施設にとどめることとし、設置すべき施設としてはトイレ、倉庫、四阿（夏場のみの仮設）とした。

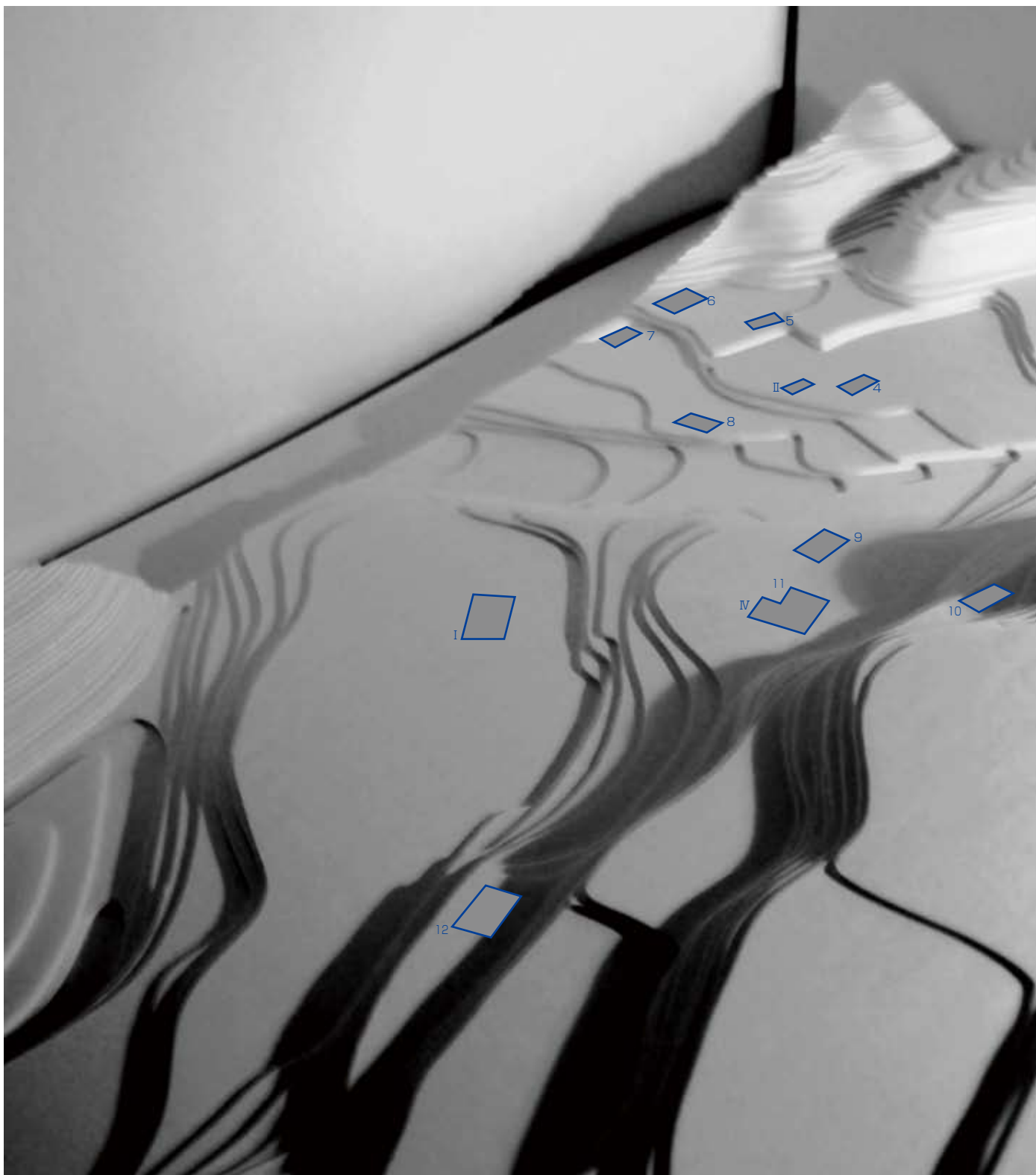
施設のデザインにあたっては、最大積雪高9m（昭和38年豪雪時）という記録を持つ豪雪地帯であることから、積雪に対する配慮（冬季閉鎖、積雪荷重など）とともに、自然エネルギーの活用として小規模水力発電の導入、バイオトイレの導入、自然の湧水の利用などを提案した。

また、集落の記憶を残すことを目的として、閉村時の集落配置を再現するため、宅盤の確認や伐採および記念植樹、集落内道路の再現などを計画し、これらの作業にあたっては、旧住民やその家族に加えボランティアを動員してイベント化することなども提案した。そのために旧住民の方々にヒヤリングをおこない、閉村時の旧集落マップを取りまとめ、それを基に地形模型を作成した（図-2）。

□吉ヶ平（山荘）分校アクソメ図



図ー1 吉ヶ平分校アクソメ図



図一2 吉ヶ平集落地形模型



共有スペース

- I 吉ヶ平山荘(分校跡地)
- II 東屋兼倉庫(鎮守様跡地)
- III 東屋兼倉庫
- IV 宿泊棟

民家跡地利用

- 1 半六
- 2 源蔵
- 3 庄兵衛
- 4 重助
- 5 弥五兵衛分家
- 6 亀ノじょう
- 7 甚三部
- 8 守門館
- 9 長蔵分家
- 10 松嶋
- 11 長蔵
- 12 次郎左衛門

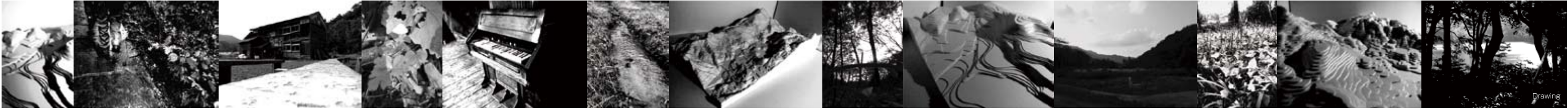
Drawing





- | 共有スペース | 民家跡地利用 | |
|-----------------|----------|----------|
| I 吉ヶ平山荘(分校跡地) | 1 半六 | 7 甚三郎 |
| II 東屋兼倉庫(鎮守様跡地) | 2 源蔵 | 8 守門館 |
| III 東屋兼倉庫 | 3 庄兵衛 | 9 長蔵分家 |
| IV 宿泊棟 | 4 重助 | 10 松場 |
| | 5 弥五兵衛分家 | 11 長蔵 |
| | 6 亀ノじょう | 12 次郎左衛門 |

Drawing



図ー2 吉ヶ平集落地形模型

長岡市立和島小学校

Nagaoka municipal Washima elementary school

「天上大風」と良寛が子供の頃に書いて与えた地
その 180 年後の同じ地に、子供達を育む
小学校が誕生しました。





所在地：新潟県長岡市小島谷（旧和島村）

竣工年：平成 21 年 3 月（校舎・講堂・飼育小屋）

平成 22 年 3 月（屋内運動場・プール）

基本構想・基本設計：平成 15 年 12 月～平成 17 年 3 月

実施設計：平成 18 年 6 月～平成 19 年 3 月

施工：平成 19 年 8 月～平成 21 年 2 月（校舎）

平成 20 年 10 月～平成 21 年 3 月（講堂）

平成 20 年 11 月～平成 21 年 2 月（飼育小屋）

平成 21 年 9 月～平成 22 年 3 月（屋内運動場・プール）

構造・規模：混構造（木造+RC 造）、平屋・一部 2 階建

11 クラスルーム

敷地面積：53,900 m²

建築面積：6,743 m²

延床面積：6,542 m²

児童数：225 人 10 クラス（平成 21 年 4 月）

210 人 9 クラス（平成 22 年 4 月）

和島小学校と共育の里構想・基本設計

木のぬくもりのある、環境にやさしく健康的な校舎。そして参観日でなくとも保護者や地域の人が気軽に立ち寄れる開かれた学校を目指しました。

木造校舎の校舎群と将来誘致される老人福祉施設予定の建築群と共に「共育の里」という「集落」を作り上げました。

子供達は地域の人々やお年寄りに見守られ、四季の草花や生物に接し、学校の野菜畑で土に親しみ、太陽や水の力を観察し、音楽や体育で心身を育て、180 年前の子供達が良寛さんと遊んだように「自然と人を思いやり、人を愛する心を培う」場となるよう構想しました。

明治以来、小学校は村の象徴であり続けましたが、平成の大合併の後もその役割は変わるものではありません。

新しい校舎になってもおじいさんやおばあさん、お父さんやお母さんの呼吸が木造の校舎を通して伝わっていきます。

和島小学校の全体計画は、地域の人々や職人のみなさん、桐島小学校と島田小学校の先生方と意見を出し合い形にしたものです。

「親から子へ、子から孫へ」「手づくりのぬくもり」を伝えていける小学校を築き上げることができました。

また、弥彦山は四周山に囲まれた和島地域にとって最も愛されている山です。田園風景と弥彦山への眺めは当たり前の風景として存在し大切に守らなくてはならない環境です。

・「共育の里」の基本方針

1. 豊かな環境創造をめざしました

- ・交流の場をデザインし、「人を思いやる心」「人を愛する心」を育みます。
- ・自然観察の場をデザインし、「自然の変化に敏感な心」を培います。
- ・スケール、材質、手作り感を体得できる空間としました。

2. 伝統的な空間を共育の里が継承します

- ・和島地域周辺の山並みの景観を大切に、デザインしました。
- ・古くからの道路や田の地割りを尊重しました。
- ・農村集落のスケールを損なわないデザインとしました。

3. 地域社会と共に共育の里を築き上げます

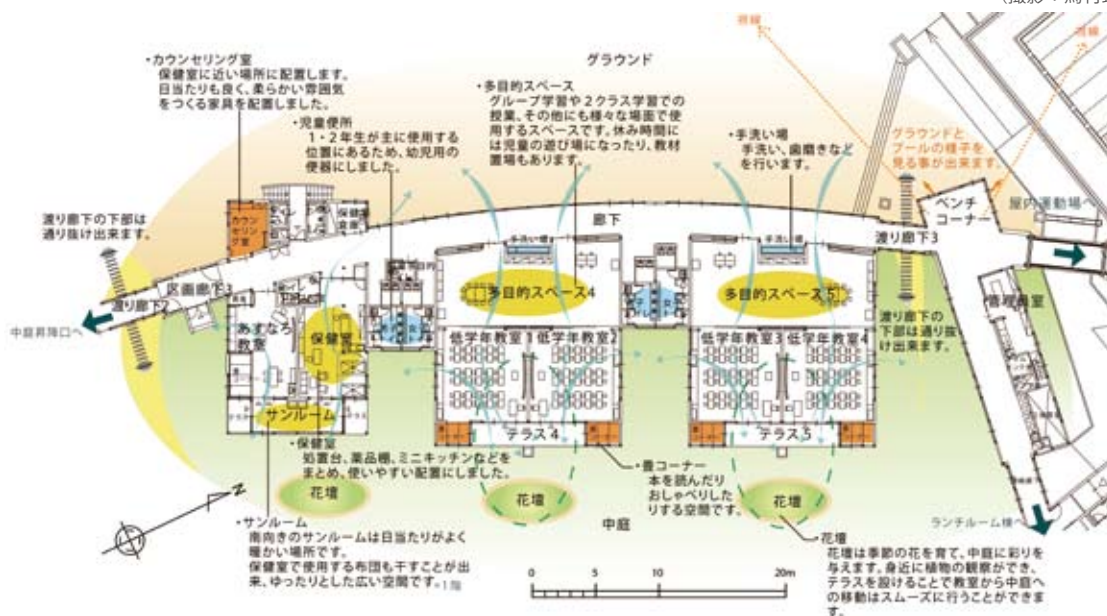
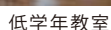
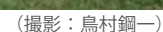
- ・地域参加型の建築のプロセスを大切にする学校づくりを行いました。
- ・和島地域の人達の活動を支援し、気がるに利用できる学校としました。
- ・できる限り地場の材料を使い、地元の職人の手によってつくりあげ、技術伝承の機会としました。

4. 安全対策と防災拠点―地域の目が行き届いた小学校とします

- ・学校の敷地の中庭など、和島地域の人たちが自由に行き来できる環境とすることにより、注意の目が行き届かせました。
- ・長岡市和島支所や既存の体育館、デイサービスセンター、と連携した防災拠点となりました。
- ・防災拠点としての機能と設備を備えた施設体制をとりました。



共育の路から見える弥彦山



低学年棟、作業棟



多目的ホール（ランチルーム）棟、図工・理科室棟



開校して1年が経った長岡市立和島小学校。
良寛さんの想いに包まれ、地域の人たちに見守られ子供たちが元気いっぱい過ごしています。
「いただきます」
ランチルームでみんなが顔を合わせることがコミュニケーションの原点です。

- 発注者 : 長岡市 (担当 教育総務課)
- 設計・監理 : 長岡造形大学
プロジェクト総括: 長岡造形大学 後藤哲男 (教授) + 後藤研究室
PM・意匠: (株)後藤設計室・アーキシップ帆
佐藤守・吉村 (高野) 雅代・内山智之・川村悦子・広川智子
(設計協力) 明石秀幸・渡邊章 (監理協力) 井戸清一・星野正栄
(積算協力) (株)中野積算
構造: 長岡造形大学 江尻憲泰 (教授)
(株)江尻建築構造設計事務所 田中哲也・藤田実・伊藤哲雄
設備: 長岡造形大学 二宮秀興 (元助教授 (現在: 鹿児島大学教授))
(株)蒼設備設計 奈良岡臣剛・猪狩雅彦・小倉康貴・赤松直道・日向野徳
外構: 長岡造形大学 飛田範夫 (教授)
長岡造形大学 村木薫 (石造形) (元非常勤講師 (現在: 新潟中央短期大学教授))
星野新治 (元研究員)
(株)長測 吉田一久 (長岡造形大学 非常勤講師)・小杉秀一
安全計画: 長岡造形大学 平井邦彦 (名誉教授)
サイン・家具・鍛金造形: 長岡造形大学 馬場省吾 (鍛金 教授)・午来馨 (非常勤講師)
長岡造形大学 小林みどり (元非常勤講師 (現在: LKD オフィス))
(設計協力) 佐藤勝己・村田かおり
- 施工
校舎: (株)植木組・(株)中越興業・(株)中元組 共同企業体
担当: 持田峰夫・佐藤孝雄・山崎徹・早川健・熊倉秀明
(株)朝日電設工業
担当: 浅井靖
(株)新潟施設・竹見設備工業(株) 共同企業体
担当: 内山巧・梅沢誠
講堂: (株)中村組
担当: 上村春夫・宮島伸一・櫻井和哉
(株)朝日電設工業
担当: 斎藤竜二
(株)佐々木商会
担当: 佐々木豊・守橋勝
飼育小屋: (株)金山組
担当: 金山忠一
屋内運動場・プール: 寺泊産業(株)・(株)中元組・(株)松井組 共同企業体
担当: 七里和博・金子秀一・渡辺祐輝
(株)朝日電設工業
担当: 浅井靖
(株)新潟施設
担当: 内山巧・池田祐介
外構: (株)中元組
担当: 中村明宏
(株)三泰建設
担当: 稲田護

受託事業名：

鯛車復活プロジェクト

発注者：巻観光協会

受託期間：平成21年4月1日～平成22年3月31日

プロジェクト主査：澤田雅浩（建築・環境デザイン学科 准教授）

プロジェクトメンバー：野口基幸（研究員）

●概要

「鯛車復活プロジェクト」とは、デザイン研究開発センター研究員である野口基幸が中心となり、10年以上前に途絶えてしまった新潟市西蒲区の巻地区（旧巻町）で江戸時代より伝わる郷土玩具「鯛車」を復活させるプロジェクトである。本プロジェクトは2005年よりはじまり主に鯛車を作るワークショップを行うことで作り手を増やす活動を行って来た。参加人数は総勢500名を超えた。

また、鯛車の認知度を上げるために2009年7月に新潟市で行われる「水と土の芸術祭」にエントリーしたところ企画が採用され郷土玩具からアートの世界に活動の幅を広げることとなった。

●鯛車の歴史

越後 巻地区（新潟市西蒲区）では、お盆の夕暮れになると、浴衣姿の子どもたちがいくつもの鯛車にあかりを灯し、町内を引いて回った。その情景は、やがて収穫の秋に入ろうとする晩夏の風物詩であった。江戸末期から昭和の中ごろまで盛んに行われてきたこの風習は、時代の変遷と共に、いつしか巻地区から姿を消していった。

元来、日本人は美しい自然の中で、四季折々の伝統行事を受け継ぎながらの暮らしを続けてきた。その生活は、現代の追いまくられるような、ゆとりのない生活にくらべ、豊かさを感じさせるものであった。

そのころは確かに貧しくはあったが、海は青く澄み、野山は緑にあふれ、まちは活気にみち、心豊かな生活を送る人々がいた。それは、現代の多くの日本人が心のどこかに求めている懐かしい日本であった。豊かすぎる現代に、なにかしら反省を迫る日本であった。そこには忘れられた日本が、そして、忘れることのできない日本がある。

●活動内容

①2009年7月～12月

「水と土の芸術祭」に参加。7月までに鯛車復活プロジェクトで70台の鯛車を制作。7月に新潟市美術館に展示。芸術祭オープニングイベントでは70台の鯛車で古町を練り歩いた。 ※1-A・1-B

②2009年4月～6月

東京表参道ネスパス新潟館で鯛車のワークショップを開催。10名が参加し6月の表参道キャンドルナイトでお披露目した。 ※2

③2009年8月15日

西蒲区巻の福井地区、船山神社で鯛車展示。 ※3

④2009年8月13日～16日

巻本町通りフリースペース、オアシスマキで「2009鯛車展」を開催。13日にはお墓参りに合わせ鯛車の貸出しを行う。 ※4

⑤2009年10月3日

巻に戦前からある醤油蔵で鯛車のインスタレーションを行う。 ※5

⑥2010年1月28日

新潟湊小学校で鯛車のペーパークラフトを作るワークショップを開催。湊小学校のある新潟日和山地区は古くから鯛車が夏祭りで使われていた。今は途絶えてしまったが今後は実物の鯛車を作るワークショップや鯛車で練り歩くイベントを展開していく予定。巻の鯛車とも関わりがあるかどうか引き続き研究する。 ※6



※1-A 新潟市美術館入りロビーにて展示



※1-B 70台の鯛車と3mの巨大鯛車と共に200名が古町を練り歩いた。このイベントから芸術祭がスタートした。



※2 以前から東京会場での教室は要望が強かったためやっと実現できた。これから毎年行う予定。



※4 2009年の鯛車展はメンバーが個々に波の模様を描いた。鯛が海の中を泳いでいる感じが表現できた。



※3 神社までの道を照らす灯りとして展示。



※5 今は使われていない醤油蔵を使ったインスタレーション。蔵の雰囲気と鯛車がよく合った。



※6 新潟湊小学校でのワークショップ風景。

1. はじめに

新潟県弥彦村は、弥彦山の裾野に弥彦神社を有し、弥彦駅からつながる参詣道周辺には湧出する温泉を活用した温泉宿やみやげ物屋等が立ち並ぶ県内でも有数の観光地である。しかし近年では、神社への参詣客がそのついでに街並みを散策することも少なくなり、宿泊客も、施設の大型化に伴う食事や買物等従来参詣道に立ち並ぶ店舗が受け入れてきたニーズの囲い込みにより、浴衣姿での散策といった風情のある景観が失われつつある。

このような問題意識から弥彦観光協会まちづくり部会では、長岡造形大学と協働して弥彦神社周辺の景観整備に取り組むとともに、ペットボトルや割り箸を再利用した手作りちょうちんを活用したナイトウォークの実施や、弥彦ウォークラリーの企画運営などを通して地域の活性化及び景観整備への意識向上を目指して4年前から活動を継続してきた。

今回の事業ではこれまでの実践活動での成果を踏まえ、よりいっそうのPR活動に取り組むものである。

2. これまでの取り組み

2-1. 協働体制の構築

新潟県巻地域振興局（当時）による「弥彦山麓景観づくりワークショップ検討委員会」により、弥彦温泉周辺が実証実験の対象地となり、そこで県内大学の学生との協働による幟の制作と掲揚が行われ、その成果に関するシンポジウム等も開催されてきた。その後、その事業自体は終了したが、弥彦観光協会と長岡造形大学が協働し、活動を発展させていくことになり、協会内のまちづくり部会に学生有志とともに参画する形で活動が継続することとなった。

2-2. 活動方法の変化

当初は幟の作成が主目的であり、協働とはいっても、地域から上がってきた要望に学生有志が一方的にデザインおよび制作を請け負うという形式にとどまっていた。しかしながら翌年以降はまちづくり部会に参画する地域住民（商店主など）が大学のアトリエを訪問して実際に制作にかかわるなど、協働の形がより一体的なものへと変化した。住民と学生が企画立案の段階から協働し、議論を重

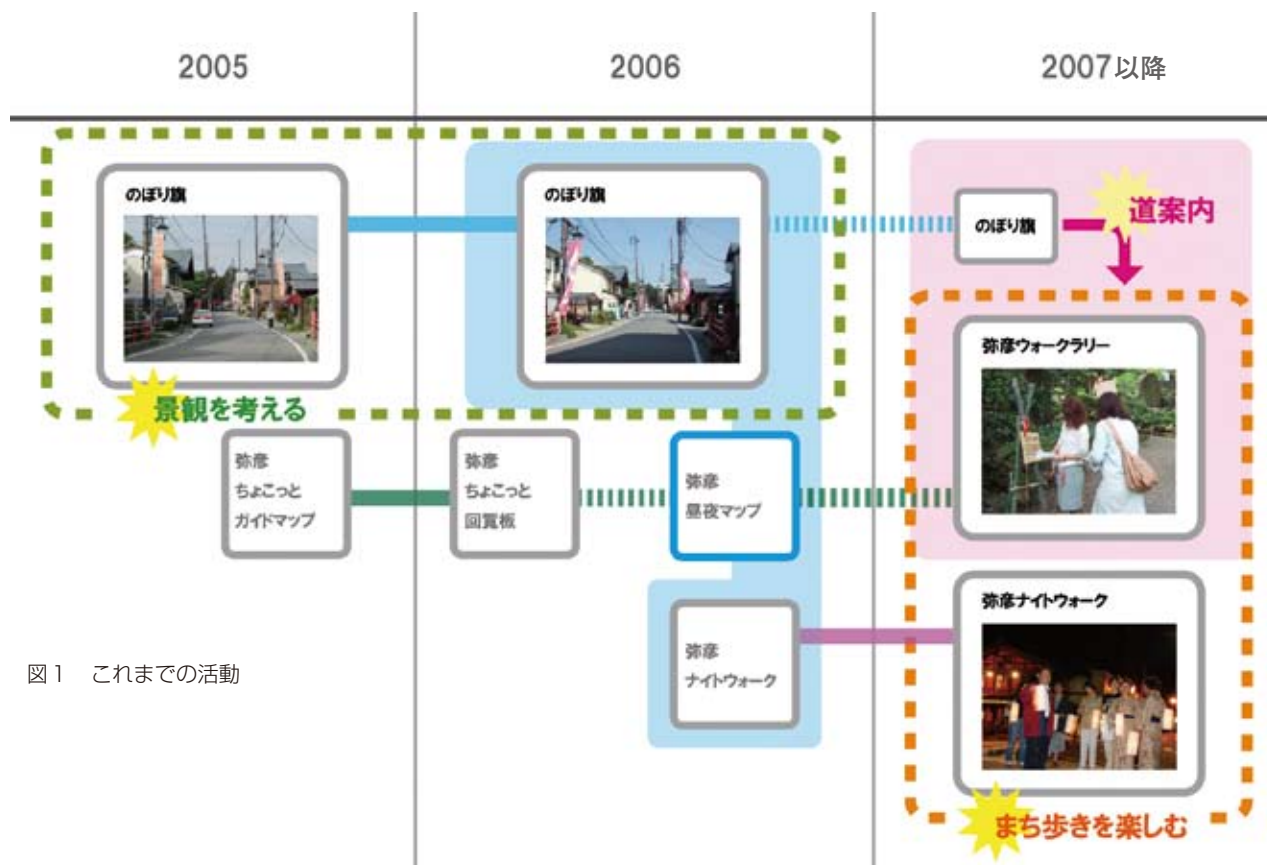


図1 これまでの活動

ねる中で、ナイトウォークの企画やウォークラリーの企画などが生み出されることとなった。

2-3. 活動目的の変化

活動方法の変化に連動して、活動の目的自体も徐々に進化してきた。当初はあくまでも一時的な景観向上を目的として幟の制作と掲揚が実施されていたといえる。それを平成18年度には幟の制作そのものもプロセスに組み込むことで、自分たちが手間をかけたものを掲揚し、その制作過程を幟を見ている人に説明するといったコミュニケーションのきっかけとして活用していくことでにぎわい創出につなげていこうという機運が生まれてきた。

さらにそこでの経験を踏まえ、あくまでも幟は地域を訪れた人、旅館等に宿泊する人の目を楽しませるツールの一つであるという理解のもとに、ウォークラリーやナイトウォークといったアクティビティを組み合わせることで「そぞろ歩き」による風情ある風景を生み出していこうという目的を共有し、活動を推進していくことができるようになったと言える（図1）。

3. 活動の目的

3-1. 活動主体の拡大

これまでは、観光協会まちづくり部会の会員有志と学生の限られたメンバーが計画作りとイベントの運営全般を担っていた。昨年度はウォークラリー時に地域住民に協力を促し、小さな幟を掲揚してもらうなど少しずつではあるがイベントの認知と参画への可能性が萌芽しつつある状況となっていたこともあり、本年度はより積極的な関与を促せるような取り組みを行うこととした。そのツールとしてこれまではメンバーで作成していたナイトウォーク用の提灯を自宅で気軽に作れるように「提灯制作キット」を開発、それを近隣住民を対象として各戸配布することを計画した。さらにはまちづくり部会の会員拡充にも取り組むこととした。さらにはこれまで積極的な関与や支援を得られなかった弥彦神社周辺に立地する旅館・ホテルに対しても積極的なアプローチを行い、宿泊客の方々への周知を依頼するとともに、イベント等への気軽な参加を呼び掛けていくことで、きっかけとしてのイベントを企画する側、参加する側、そしてその舞台となる地域が一体となって今後のまちの活性化に取り組めるような状況

の生み出しを第一の目的とした。

3-2. これまでの活動総括

先述のように、これまでは地域の商業者の発意により、大学との連携によって活動の大部分が賄われてきていた。特にナイトウォークやウォークラリーはイベントとして徐々に認知をされ、参加者の中には複数回参加してくださる方も見られるようになった。また、舞台となる地域住民の協力も少しずつ得られるケースも出てきた。しかしながらこのような活動が最終的には地域の景観向上を伴うまちづくりへとつながり、風情ある弥彦を実現しながら活性化を図るという活動を志向していることへの認知はほとんどないといえる。そこで、数年来実施してきたこの活動の実績を踏まえ、外苑坂通りに面して立地している町立体育館の郊外移転・建て替え事業に対してその跡地利用に關してのアンケートをまちづくり部会として実施を試みることにした。直接的ではないがこのような調査をまちづくり部会で行うことによって、移転後の空間利用に関する意見を集約するだけでなく、活動認知や評価に関しても明らかにしようとするものである。これらの一連の振り返りや調査結果のまとめとその活用によってこれまでの活動を総括し、今後の具体的な活動方針へとつなげていくことをもう一つの目的とした。

4. 今年度の活動

4-1. まちづくり部会を中心とした全体の活動

本年度は活動開始前にいくつかのイベントがすでに予定されていた。特に観光キャンペーンとして非常に集客力のある「デスティネーションキャンペーン(DC)」が2010年10月に新潟県を対象として実施されることが予定されており、そこでの集客および活動の周知は重要であった。それ以外にも弥彦神社や公園周辺で例年通り予定されているイベント等に合わせる形でナイトウォークやウォークラリーの日程を調整することから部会の活動は始まった。本年度は最終的にまちづくり部会としては13回が開かれ、ナイトウォークのルート選定や提灯づくり、そしてイベント後の振り返りなどを精力的に行ってきた。それ以外にも8月初旬には地区内約250軒の住民に対して提灯制作キットを配布したり、新たに作成した浪漫提灯を宿泊施設に紹介し、

注文を受けるなど、まちづくり部会と学生によって部会以外にも多くの活動を積み重ねてきた。

4-2. ナイトウォークの実施

5年前に学生からの提案によって始まったナイトウォークも、当初関与していた学生が卒業に伴って不在となり、それを引き継いだ学生とまちづくり部会によって継続されてきた。しかし当初掲げた最終的な目的である、このイベントによって街並みの風景として神社や温泉を訪れた人々がそぞろ歩く姿を生み出し、その波及効果によって景観づくりを行う体制を構築するという意識が薄れつつあった。

確かにナイトウォークは実施することで単体のイベントとしても「楽しかった」「また企画してほしい」といった意見をもらうことができていることからある程度の効果を持っている。ただし、その実現には多大なマンパワーが投入されていることも事実である。実際に好きな時に人々が街並みを散策する仕掛けとしては、若干運営方法の見直しをする必要が生じていたといえる。

そこで、本年度は「フリーナイトウォーク」の運営を試みた。これまでのように集合場所や時間をあらかじめ決めておき、ボランティアガイドの案内によって決められたルート歩くのではなく、いくつかの情報を頼りに訪れた人がそれぞれの関心や体力に応じてルートを選択して楽しんでもらうという手法を採用することとして事前準備を検討してきた。実際にこれまでは提灯がろうそくの炎で溶けだしたり、炎そのものが消えてしまうなどの問題があり、それには同行するスタッフで対応を行ってきた。フリーでの行動を許容することでこれらの問題への対応が迅速にできなくなることから、見どころを示したマップを作成し、そこに提灯の持ち方を明示することである程度の対応をするとともに、モデルルートを設定しそのルート上に「まめカフェ」を設置、休憩及び不具合のある提灯の交換等を行える準備を行い、少なくなったスタッフはそれらの拠点に配置することとした。

ナイトウォークは10回計画されていたが、雨天中止が3回あり、結局7回の実施となり、合計で335組の参加が得られた。弥彦公園で開催されるホタルまつりに合わせた従来型の回が最も人出があり、フリーの回は悪天候の影響もあるが、あまり多くの参加者は得ら

れなかった。しかし8月5日に地域に配布したキットを活用して参加した方もあり、今後の可能性について実感を得ることができた。ただし、効果を期待したDCとの連動に関しては十分な成果を得られなかった。

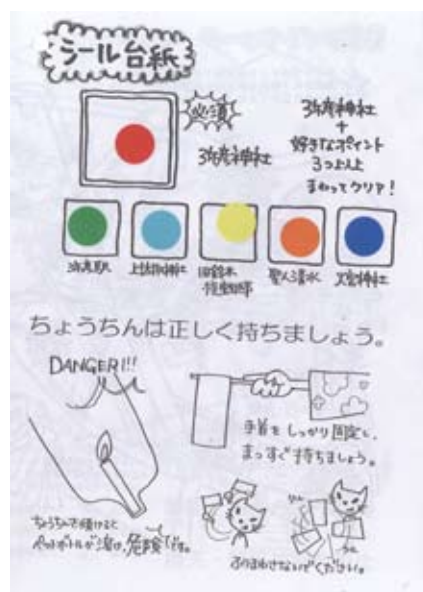


図2 フリーナイトウォークマップ



写真1 ナイトウォーク・まめカフェの様子

4-3. 浪漫提灯の制作

ナイトウォークの実施に際してこれまではペットボトルや割り箸の再利用を前提とした簡易型のものを利用してきた。これは環境負荷を抑えたいという意向に加え、材料入手や加工が容易であるため制作の手間をある程度軽減できるという利点があった。一方でろうそくの炎でペットボトルが溶けたり、覆いとする紙が湿気で弱くなってしまう一度利用すると見栄えが悪くなるなどの問題を抱えていた。結果として宿泊施設への展開を考えると、その点が導入を躊躇させる一因ともなっていた。

そこで本年度は長岡造形大学プロダクトデザイン学科の教員と学生の協力を得ながら、プロダクトとしての質を向上させ、電池とLEDを利用した恒久型の提灯を開発、希望者への配布を行った。事前に試作品を宿泊施設に見てもらい、注文を募った結果旅館組合加盟の17軒で採用された。貸し出しは11月に入ってからであったため、本年度はナイトウォークとの連動は行われなかったが、次年度以降の可能性を見出すことができたといえる。



写真2 作成した浪漫提灯

4-4. ウォークラリーの改善

ウォークラリーに関しても、参加者の滞在時間の延長を目指し、地域内の商店等へも波及効果を生み出すための改善を行った。チェックポイントの見直しを全面的に行っただけでなく、弥彦駅から弥彦神社に至るいくつかの名のついた通りを意識してもらうための吹流しの掲揚とマップへの記載などを行った。さらに参加者への景品として、これまでのナイトウォークで利用したろうそくを再利用し、アロマキャンドルを制作、その経緯を紹介しながら配布することで環境面にも配慮した計画を実施していることを意識づけることができたといえる。

4-5. 住民意識の集約

まちづくり部会の活動は、その拠点を何度か変更してきた。当初は町立体育館を活用していたが、その後駅前の空き店舗を部会開催時や作業時、イベント時に無償で借りることができ、活用を行っていた。しかし事情によって利用ができなくなったため現在また体育館を活用している。その体育館は将来的に地域外に移転し、この体育館は取り壊されていることが決まって

いる。町はこの跡地を民間主導の開発にゆだねる意向を示していたが、まちづくりを進めていくうえで重要な場所であることから、まちづくり部会主導で住民から意見を募ることとした。そこでは、ナイトウォークなどの活動を評価し、今後みんなで協働してまちづくりを行っていく上での拠点として活用すべきだという意見なども得ることができた。そこで活動にも参画している行政とより一層の連携を図るべくその意見を携えて町との意見交換を行った。結果として、町長を交えた形で1回、現場レベルでも1回行われ、必要に応じて連携を取っていくことが合意されるなど、今後に向けた可能性を見出すことができたといえる。



図3 ウォークラリーマップ

5. まとめと今後の課題

今年度は当初目標としてきた活動主体の拡大に関しては一定の効果を得ることができた。運営側の人数は減少したものの、フリーナイトウォークへの移行に伴う効率的な運用のめどがついたといえる。また制作キットの配布により地域住民の参加が増えたことは今後の主体的な参加者の獲得および運営への参画の可能性をうかがわせるものである。さらには宿泊施設も浪漫提灯の開発と提供によって今まで以上に好意的に取り組みを評価してくれるようになったといえる。さらには行政との具体的な計画作りへの協働の糸口も見えはじめるなど、マンネリ化を危惧した活動が次のステップへと移行する契機となったといえる。今後もこのきっかけを逃さず、より充実した活動と、普段のまちづくりへの展開へと結びつけていくことが肝要であると考えている。

受託事業名：

長岡市歴史的建造物調査

発注者：長岡市

受託期間：平成21年6月20日～平成22年3月13日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子（研究員）

1. 本年度の活動内容

長岡造形大学では、平成14～16（2002～04）年度にかけ、長岡市からの依頼で旧長岡市内における歴史的建造物の悉皆調査を実施し、平成18（2006）年、旧市域から10件の国登録有形文化財を出すに至った。

一方、長岡市は平成18（2006）年度までに栃尾市など周辺9市町村と合併したため、平成19（2007）年度からは旧長岡市域以外における歴史的建造物の悉皆調査の実施が、長岡造形大学に委託された。

平成21（2009）年度は、旧寺泊町及び旧与板町地域において歴史的建造物について悉皆調査を行った。日程は平成21（2009）年8月から9月にかけて現地調査を実施したものである。調査の方法は住宅地図に基づ

き、公道より望見できる範囲内で当該地域における全ての建造物を確認の上、概ね建築後50年を経た建物を中心として写真撮影を行い、一部で聞き取り等を実施し、建築構造などを項目とした調書を記録として作成した。調査対象物件は5,800棟程で、ここから条件を満たす630棟余の歴史的建造物などを確認した。

なお、2010年度日本建築学会北陸支部において以下の報告を実施している。

- ・平山育男・西澤哉子：長岡市寺泊地域における真壁土蔵について 長岡市歴史的建造物悉皆調査(6)
- ・平山育男・西澤哉子：長岡市寺泊・与板地域における茅葺民家について 長岡市歴史的建造物悉皆調査(7)



写真1 寺泊北曾根 WK家

2. 本年度の調査で判明したこと

・当該地域における茅葺建物

寺泊地域では18棟、与板地域では4棟の茅葺建物が確認された。

寺泊地域では茅を露出するものが2棟、かつて茅葺であったものを改造したものが1棟、残りはいずれも金属板で被覆するものであった。また、18棟の内、6棟が宗教系の建物であった。

与板地域では4棟いずれもが茅葺を金属板で被覆するもので、2棟が宗教系の建築である。

寺泊地域は大別すると日本海沿の集落と、海に沿って成立した丘陵側に分布する集落に分かれるが、海沿の集落には4棟、丘陵側には14棟が分布し、後者の方が多くの数量を確認することができた。

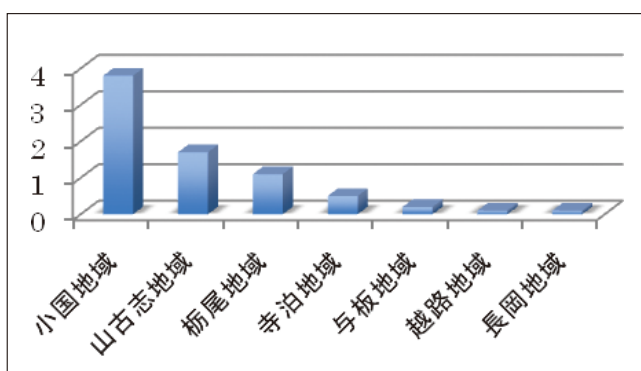
一方、与板地域は信濃川沿いに成立し、背後に丘陵地を構えるものであるが、中心市街地に茅葺の建物は見られず周辺の地域で確認された。

寺泊、与板各地域における茅葺建物の出現率を見たい。分母は各地域における世帯数として見たものが図1で、既に調査を終えた周辺地域のものと比較している。

これによれば、寺泊及び与板地域とも出現率は1%未満であり、中山間地地域に広がる栃尾地域の1.1%や小国地域の3.8%に比べれば極めてその数の低いことが分かるであろう。

かつて見た長岡地域においても、茅葺建物は丘陵地に多く、平野部では極めて少数であったことを数量的に示すものと言えよう。

図1 長岡市各地域における茅葺建物の出現率 [%]



・真壁造の土蔵

真壁造の土蔵とは：真壁造の土蔵とは、以下の写真に示したように外部から望見できる範囲で軸組までを真壁造、即ち壁外面を柱外面で納める形式で、梁組以上の鉢巻部分などは大壁とする形式を示すものである。この真壁形式の土蔵では写真8に挙げたように柱を1尺程度と密に建て込む場合が多々あり、また写真1のように妻壁面には獅子の鍔絵を施すなど装飾性に富むものも散見することができた。

数量：真壁土蔵は寺泊地域において31棟を確認することができた、与板地域においては1棟も見ることができなかった。

ところで真壁形式の土蔵では真壁部分の途中部分までを下見板壁で覆うものが多数棟散見され、更に妻壁下まで全てを下見板壁で被覆するものも数々確認された。但し、この軸組部分全てを下見板壁で覆う土蔵の場合、これが真壁形式あるのか大壁形式であるのか今回の外観調査において判断を下すことができなかった。そのため本稿では軸組全てを下見板壁で覆う形式は該当する形式としては挙げてはいないが、この中にはかなりの数量、真壁土蔵のものが含まれる可能性が高く、実際の数量は上に述べたものを大きく上回るものと判断される。

分布：真壁土蔵は寺泊地域の特に丘陵地域において広く分布することが確認された。但し、今回同時に調査を実施した隣接する与板地域では1棟も確認することはできなかった。

なお、この真壁造土蔵は寺泊地域のみに見られるものではなく、三条及び下越地方などやや広い地域においても散見されるものである。

寺泊地域は長岡市北部に位置し、北側は日本海に面し、北東側は弥彦村、新潟市に直接隣接し、下越地方、県央地位と密接な関係も有している。即ち、これらの地理的条件が真壁土蔵の分布にも強く関係するものと推測することができよう。

3. さいごに

長岡市域では、各地域に特色ある建物が数多く残る。調査の結果に基づき、特色ある地域づくりの素材とすることを期待したい。

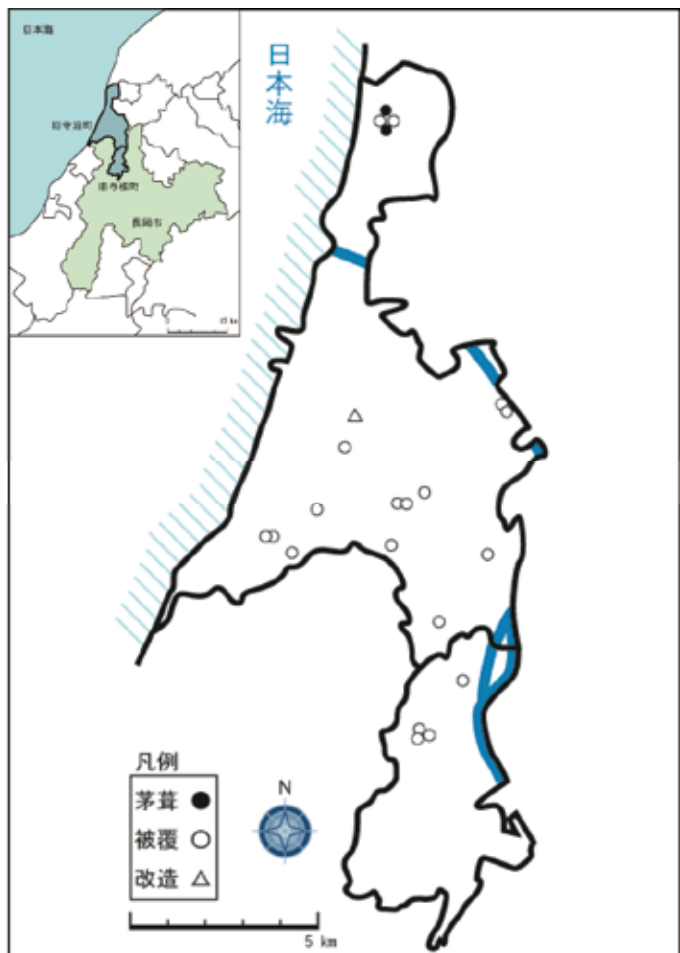


図2 長岡市寺泊・与板における茅葺の分布



写真4 寺泊五分一 FM家 鉄板被覆



写真5 寺泊引岡 TY家 改造



写真2 寺泊野積 AA家



写真6 与板町馬越 馬越神社 鉄板被覆



写真3 寺泊野積 MM家



写真7 与板町本与板 YK家 鉄板被覆



図3 長岡市寺泊・与板における真壁土蔵の分布



写真10 寺泊求草 AK家



写真11 寺泊深長 TS家



写真8 寺泊夏戸 FM家



写真12 寺泊町軽井 TK家



写真9 寺泊夏戸 KY家



写真13 寺泊北曽根 WK家 妻面に鍔絵

受託事業名：

大崎浄水場建造物詳細調査業務

発注者：三条市

受託期間：平成21年8月21日～平成22年1月5日

プロジェクト主査：平山育男（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：西澤哉子（研究員）

1. はじめに

三条市より三条市大崎浄水場における歴史的建造物調査の依頼があり、同浄水場の取水ポンプ場、洗砂場、事務棟、送水ポンプ場、旧番宅、配水池機械場、量水器室などの調査を実施した。

2. 三条市における上水道計画について

①明治27（1894）年 バルトンによる上水道調査

三条市においては近代以来5回の計画があり、昭和8（1933）年のものが実現に至った。

1回目は明治27（1894）年、お雇い外国人であったバルトンによるもので、報告書訳（複写）、翻刻及び口語訳全文を長岡造形大学紀要7号に報告した。バルトンは同年7月12日に新潟へ向い、新潟及び新発田において上水道敷設についての調査を実施した上、三条町の調査は7月16日から19日にわたって3泊4日の日程で実施した。なお、「報告書訳」は原本が残らず、昭和8（1933）年3月の写しの孔版が伝わる。「報告書訳」は行方不明になっていたものが、近年、発見されたという。

バルトンによる調査では、給水法において現今の五十嵐川上流部からのものは概ね良好であること、下水方では特に浅井戸に問題のあること、給水方改良案は、高圧式には経済的な問題があり低圧式を提案し、給水入口は籠場とする既存案を追認するものの、給水引入位置は、籠場案より下流を提案している。導水管に磁管、接合にはセメント使用を挙げ、コンクリート管使用も言及する。

このようにバルトンは上水道の計画を白紙の状態からではなく町内において醸成された案を吟味する形であったが、本計画は資金難から実現には至らなかった。

②大正元（1912）年 三条町水道敷設計画

大正元（1912）年の三条町水道敷設計画は、同年12月にまとめられたものの実現には至らなかった。この計画の契機は当該地域における明治44（1911）年の電力事業開始が大きな要因として考えることができる。

計画案は五十嵐川上流の高屋敷を取水地として、大崎村浄水場内に沈殿池、濾過池、ポンプ室、配水池などを設け、三条の市街地へ浄水を配るものであるが、計画案を見ると、量水器をポンプ室に設置するなど配

水管の計画に無駄がある一方、ポンプ室は煉瓦造、浄水池上屋を木造での設計となる。この計画は予算的に問題があるとされ改良が迫られた。

③大正2（1913）年 三条町水道敷設計画

大正2（1913）年計画書は、前年の計画を受けて同年8月にまとめられ、12月の町議会において審議されたものの、またも時期尚早として実現には至らなかった。

計画は五十嵐川左岸月岡を取水地とし、月岡浄水場には沈殿池、濾過池などを設け、送水ポンプにより山上の浄水池へ揚水し、自然流下により配水を行うものである。ところで、計画書では再三、“経費節減（約）”の語が使われる。これは大正元（1912）年計画に対しての財政的な修正の結果であったが、予備発電機の不設置、木造機械室、木製水道管の利用など、常時性や耐震・耐火性に問題があり、大正元（1912）年計画からの後退であった。

④大正5（1916）年 三条町水道敷設計画

大正5（1916）年計画は井上二郎によるものであ

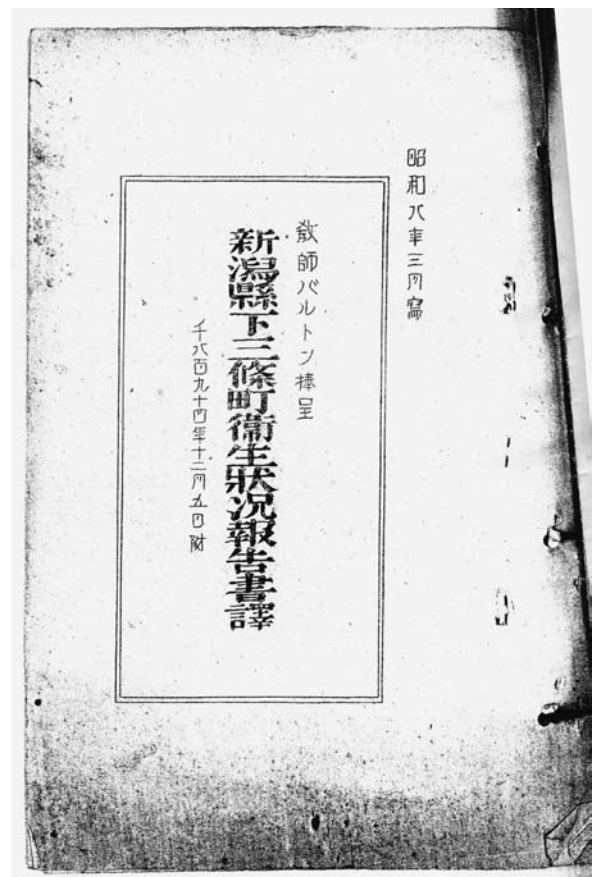


図1 バルトンによる上水道調査



写真1 取水ポンプ場



写真2 正門及び事務棟



写真3 送水ポンプ場



写真4 送水ポンプ場

た。本計画案は明治時代のバルトン案以来、数次に渡って立案された水道建設計画を強く意識するもので、取水場を中心市街地に近い三竹とし、浄水場を設け、揚水ポンプ、薬品混合機、沈澄池、濾過機、吸水井、給水唧筒の設備として、田島に水塔及び水槽を設けるものである。機械濾過法は濾過池を設けない分、工事費は

抑えられるが、経常費は自然濾過法に対して割高となる。

⑤昭和8（1933）年 三条町水道敷設計画

このように三条では明治時代以来の水道敷設計画案が悉く廃案となり、昭和8（1933）年に至りようやく5度目の案が竣工を見るに至った。この計画で技術面を茂庭忠次郎、建築面は長谷川龍雄が担った。

3. 大崎浄水場の建物

一連の建物はデザインの概要を見ると、いずれも昭和8（1933）年、長谷川龍雄により設計がなされたものと考えられる。各建物は極めて高い造形の質を有するもので、今後の保存活用が期待される。

①取水ポンプ場

五十嵐川右岸際に位置するこの建物は昭和8（1933）年、通水当初の建築である。内部には照明器具まで残り、当初の形式と技法をよく伝える瀟洒な建築である。



写真5 配水池機械室

②事務棟

事務棟は浄水場緩速濾過池際に立つ木造の流造形式のもので、屋根に反りを持つ建物である。平面に一部、変更は見られるものの、当初の形式を良く示す。

③送水ポンプ場

送水ポンプ場はRC造で、四周にロンバルトベルト、窓枠上部に半円の窓形壁を配する。当初は内部に送水ポンプ、予備発電機を配したが現在は、ポンプのみとする。

④旧番宅

配水池の置かれる要害山へ至る途中に配される二戸一棟木造の住宅で、現在は物置として使われる。

⑤配水池機械場

要害山中腹に置かれる配水池に付属する機械室で、RC造、内部はタイル張りとする。

⑥量水器室

配水池から少し下った地に配され、現在、量水器は外される。小規模だが意匠は送水ポンプ場と同一。

⑦洗砂場

緩速濾過池東側に配される。当初は南側にあったものを、早い段階で現在地に移転を受けている。



写真6 量水器室

1. はじめに

三条市中心市街地における建造物の悉皆調査を三条市から委託された。本稿では平成21（2009）年度における調査の概要を述べるものである。なお、三条市では中心市街地活性化の一環として、当該地域に所在する町並み及び町家の調査を計画したものである。

2. 三条市中心市街地の概要

三条市の中心市街地は信濃川右岸、五十嵐川との合流地点に広がる。今回の調査地域は東から横町1丁目（一部）、神明町、旭町1丁目、居島、東裏館1丁目（一部）、本町1～6丁目、元町、八幡町の東西約1km、南北約500mで、北境をJR弥彦線、南境を五十嵐川、西境を信濃川とするものである。この地域内において、平成21（2009）年8月公共施設、寺社建築及び商店住宅など1,542件を確認し、これらに対し建物の写真撮影、概要調査等を実施した。

3. 三条市中心市街地の歴史

三条の町は近世、三条城が築かれ堀氏が入ったが廃城となり、替わっては村上藩の支配となり城跡には郡役所が置かれた。近代において三条は足袋、染物、金物の生産が盛んで、刃物・金物業が現代にまで続いている。

市街地は近世から明治時代にかけて度重なる大火に見舞われた。明治時代以後でも焼失戸数が300戸を越える大火は、明治13（1880）年5月の2,743戸、明治20（1887）年10月368戸、明治28（1895）年11月336戸、明治30（1897）年6月の「ランプ屋火事」367戸と4回が記録されており、当該地域における町家の大半はこれらの火災後に建築されたと言う。

4. 三条市中心市街地における建物の概要

・**建築年代**：1,542件中、明治時代に遡ると考えられるものが20件（1.3%）、大正時代が24件（1.6%）、昭和戦前期が210件（13.6%）、合計すると戦前期までの物件が254件（16.5%）に及んだ。

・**屋根葺材**：戦前期までの254件中、桟瓦葺が154件（60.6%）、鉄板葺が100件（39.4%）であった。

・**屋根形式**：254件中、切妻造が196件（77.2%）、入母屋造が43件（16.9%）、寄棟造が11件（4.3%）、半

切妻造が4件（1.8%）であった。

・**道路との関係**：道路との関係では254件中、妻入が187件（73.6%）、平入が67件（26.4%）であった。

5. 三条市中心市街地に特徴的な建物

・**入母屋造せがい造の町家**

三条市中心市街地においては、いわゆる「せがい造」の町家も散見することができた。せがい造を有する町家は18件（7.1%）であった（写真7・8）。

ところで、切妻妻入形式の町家において、妻面においてせがい造を施すことはできない。そのため一般的にせがい造を設ける場合は、平入形式や、妻入形式でも寄棟造や入母屋造に限られることとなる。実際、三条市の中心市街地で見ることのできたせがい造の町家は、9件が入母屋造妻入、7件が切妻造平入、2件が寄棟造妻入の形式となるものであった。

調査を通して本町通りに面して入母屋造せがい造の町家7件が集中して建つことが分かった。間口規模も3間以上が大半で、他の町家に比べるとやや大きい規模である。加えてこれらの建物はいずれも軒高が高く、建築年代はやや下るものと判断された。聞き取り調査によれば、これらの建築年代は大正時代末から昭和戦前期に偏ることが明らかとなった。

入母屋造せがい造の町家は、新潟県内ではこれだけ集中して見ることは管見の限りはない。その意味で三条市中心市街地における入母屋造せがい造の町家は、特色ある形式と見ることができよう。

・**切妻造妻面に幣串を有する町家**

三条市中心市街地において戦前期に遡る254件の内、切妻造及び入母屋造で妻入の形式を有する町家は181件（71.3%）に及び、これが当該地域における一般的な形式と考えることができた。

ところで、この内、数は5棟と少ないが、妻面に「幣串」を打ち付ける町家を見出した。

①YA家住宅主屋 三条市元町

YA家住宅は中央公民館近隣で裏通りに面し、2階建で建ちがやや高い。正面側妻面棟束と二重目の小屋梁中央縦に幣串は釘止めされる。

②NB家住宅主屋 三条市本町5丁目

NB家住宅は裏通りに位置し2階建で建ちがやや高

い。正面側妻面棟東中央縦に幣串は釘止めされる。

③UN家住宅主屋 三条市八幡町

この住宅は裏通りに面し鮮魚店を営む。2階は建具が掃き出しで建ちが高い。紙垂が少量残る幣串は、正面妻蟻羽棟木下に先端を建物側に向けて釘止めされる。

④NT家住宅主屋 三条市元町

NT家住宅は本町通りからは1本入った通りに建つ。建ちがやや高く、幣串は背面妻面棟東に釘止される。

⑤TU家住宅主屋 三条市本町3丁目

TU家住宅は裏通りに位置し、2階階高が高い。幣串は正面妻面、2本ある下側の小屋梁へ縦に釘止めされる。

⑥FM家住宅主屋 三条市西裏館1丁目

この住宅は当調査対象地域外であるが、調査地域と道1本隔てて建ち、正面妻面に幣串を縦に釘止め。

以上、5例はいずれも建築の軒高さが高く、建築年代は昭和戦前期頃のものと同推された。

ところで三条市中心市街地において幣串はこのように妻面外に打ち付けるのが一般的であるのだろうか。今年度は他にも幾つかの建物調査を実施したが、旧料亭若松では幣串が小屋裏において発見され、必ずしも妻面に幣串を打ち付けることは一般的ではない。

三条市以外では、長岡市栃尾表町の住宅で2階正面に3本の幣串を掲げる例を確認した。また、柏崎市高柳地域、長岡市与板町でも同様の例を散見した。

三条市中心市街地における建造物悉皆調査において、妻面外に幣串を有する建築5例を確認し、建築年代は昭和戦前期と同推した。なお、④の例で幣串は建物背面に配される。調査は原則、建物正面側の公道から実施したため、遺漏の余地があると判断できる。

・妻面に扱首組を有する町家

三条市中心市街地においては、調査棟数1,542件の内、戦前期に遡るものは254件（16%）、このうち切妻妻入の形式は144件（57%）で、これらの中には以下に示すように妻飾に扱首組を有する町家9件が確認された。

①TI家住宅主屋 三条市本町6丁目

市中心市街地の裏通りに面して位置する。立ちはやや高く、妻飾となる和小屋の貫は2本配される。

②FM家住宅主屋 三条市本町6丁目

この住宅も裏通りに位置する。立ちはやや高いものの、間口が狭く妻飾の貫は1本となる。

③TY家住宅主屋 三条市本町2丁目

本町通り南側の角地に位置する建物である。軒高さがやや高く、妻飾となる和小屋の貫4本が配され、装飾性に富む。昭和時代初期の建築と考えられる。

④SS家住宅主屋 三条市元町

裏通りに位置する住宅で、立ちがやや高い。妻飾の貫は2本である。

⑤KK家住宅主屋 三条市本町4丁目

本町通り北側角地に位置する。軒高は低く、妻飾に貫を2通り配する。格子を用いた構成は市街地を代表する建物の1つと目され、明治時代の建築とされる。

⑥SH家住宅主屋 三条市本町2丁目

新大橋際に配される町家で、やや建ちが高い。妻飾に貫が2通り配される。

⑦TT家住宅主屋 三条市本町2丁目

裏通りに面して建つ町家で、隣家と比較すると立ちが低く、妻飾の貫は2通り配される。大正時代の建築と判断されよう。

⑧NN家住宅主屋 三条市本町4丁目

五十嵐川に面し妻を設けるもので、妻飾には菱形の気抜用窓を設ける。

⑨YS家住宅主屋 三条市本町5丁目

本町通りに面し商店として用いられる。立ちはやや低く、母屋位置とは関係なく妻飾には貫が3本配される。大正時代の建築か。

9棟の建築年代は明治時代後期から昭和戦前期となり、大正時代を中心として使われたと言えるだろう。なお、三条市では切妻平入で金属板葺とする周辺部の農家において妻面に扱首を用いる例を見ることができた。今後、両者の関係も探りたい。

6. さいごに

三条市中心市街地には、特色ある歴史的建造物が比較的多くの、しかも地域内に満遍なく分布する。今後、調査の結果を踏まえて、積極的な活用が期待されるものである。



図1 本町通り連続立面図

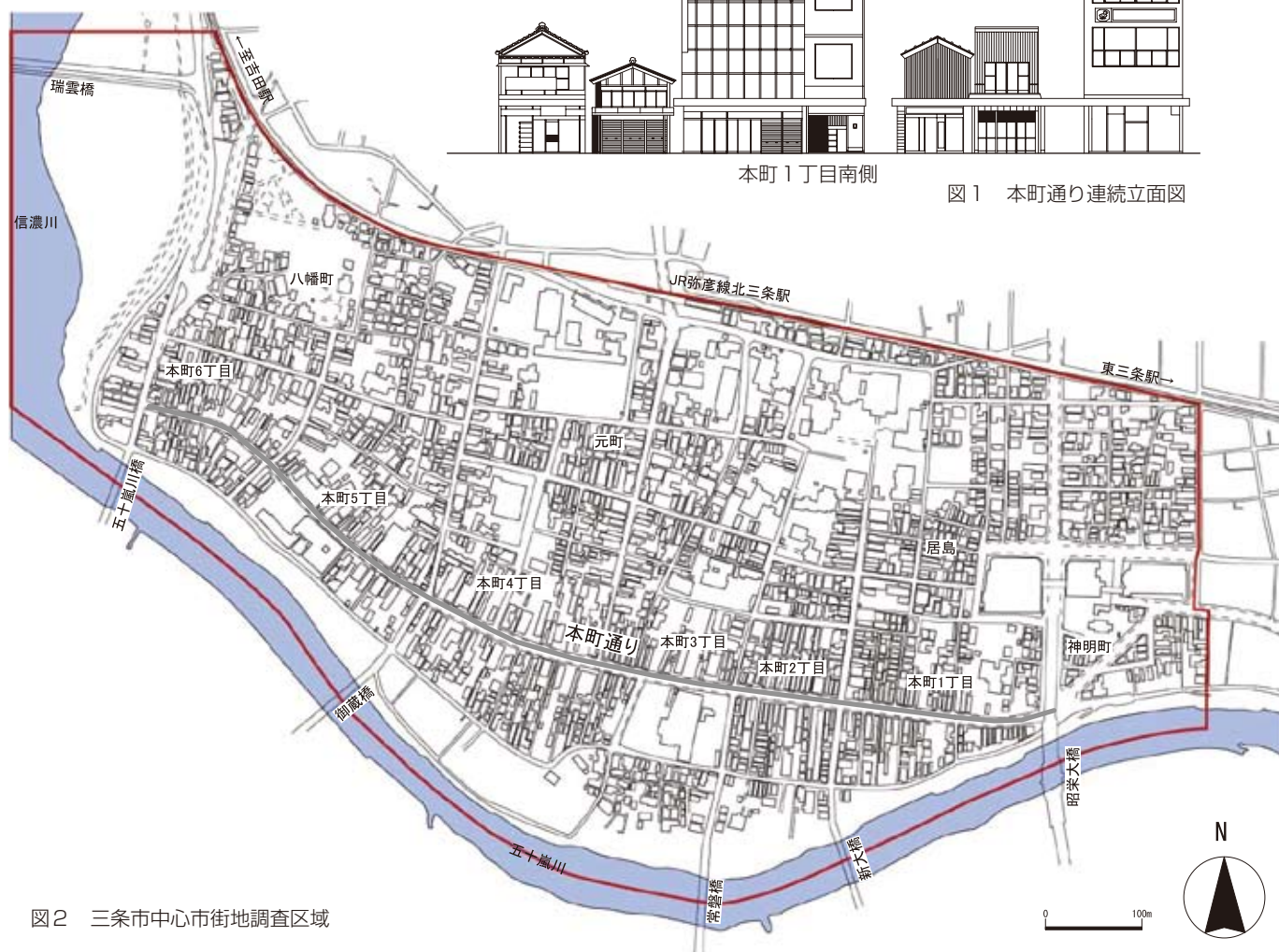




写真3 SS家 明治時代後期



写真7 IS家 昭和時代後期



写真4 MG家 明治時代後期



写真8 YT家 昭和時代初期



写真5 SK家 大正時代



写真9 WJ家 昭和時代初期



写真6 SG家 大正時代



写真10 IJ家 昭和時代初期

子育ての駅施設整備に係る備品等選定業務

発注者：長岡市（教育委員会子ども家庭課）

受託期間：平成21年8月1日～平成21年10月10日

プロジェクト主査：山下秀之（建築・環境デザイン学科 教授）

プロジェクトメンバー：山下真理子、武井奈津美



「ちびっこ広場」
「絵本の庭」における可動式絵本棚



「ちびっこ広場」
左上：「絵本の家」、右上：平置きのテーブルとベンチソファ、下：「絵本エリア」

□ プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、子育ての駅千秋「てくてく」につづく、以下の2つの子育て支援施設において、空間プログラムを検討し、具体的な備品（家具・遊具）を選定・積算し、各施設に特色を持たせようとするものである。

- A 大手通中央西地区子育ての駅「ちびっこ広場」
絵本館、大手通り沿いの再開発ビルの2Fと3F
一時預かり保育あり、約1400㎡、駐車場なし
- B 市民防災公園子育ての駅「ぐんぐん」
防災拠点施設の2F、食育・造形（絵の具、粘土等）
一時預かり保育なし、約500㎡、駐車場あり

□ プロジェクトに着手するにあたり

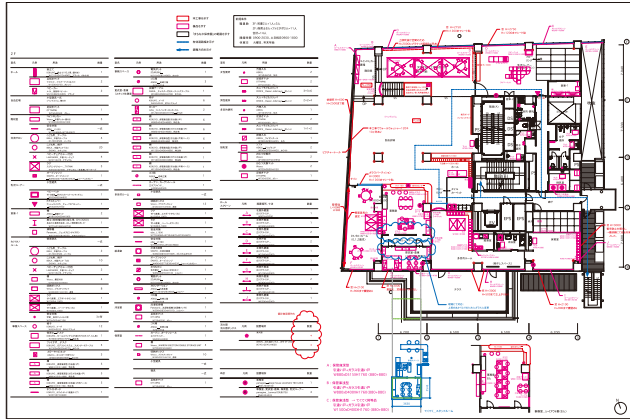
両施設とも、建築本体設計は株式会社松田平田設計による。ともに、実施設計が終わっている段階にあった。

備品選定の検討に先立ち、本工事で抜け落ちているアイテム（安全対策や外装廻りのガラス安全対策など）と、発注者サイドに立って必要と思われるアイテムのリストアップを行った。その一方で、松田平田設計によるデザイン意図、空間特性、排煙設備、避難経路の観点で両施設を把握し、備品選定を検討した。

□ 「ちびっこ広場」の空間プログラム

「遊具と絵本が混在しているような絵本館にしたい」、という子ども家庭課のコンセプトを受け、ありきたりの低い書架を並べるだけではなく、ストーリー性を感じられるような空間プログラムを検討した。

まず、市の計画では、2層（2Fと3F）に混在していた「ままごとコーナー」と「読み聞かせコーナー」を完全に分け、ままごとを2Fに集約し、絵本を3Fに集約することを提案し、了承された。次に、魅力的なブックショップや出



大手通中央西地区子育ての駅「ちびっこ広場」における備品検討
下層階平面図

没頭できるよう、あるいはまた、車の運転席やバックシートで絵本を読めるよう、「行為と場所」の仕掛けづくりをした。

(2) ギャラリースペース

小さいながらもギャラリースペースを提案した。平置きに絵本が積まれた横の壁に、絵本の原画がスポットライトを浴びている、そのような大人目線の空間プログラムを提案した。関西、西宮市にある「大谷美術館」では、毎年、絵本原画展が催され、大人が楽しみにしている。ポロニャ絵本コンクールの作品展示も実施され、小さい時から本物にふれる大切さを、長岡市も理解してくれた。

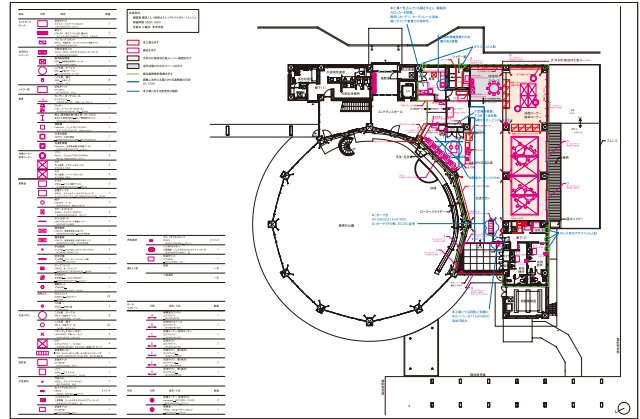
ADD-LINE社の子ども用の机と椅子「puzzle」と平置き用のテーブル（折りたたみ可能）を選定した。平置き用のテーブルは、長岡市もそのデザイン性の良さに感心し、安全対策のラパークッションをつけることをためらったほどである。机の下面の角にゴムをつけて運用することにした。

(3) パパ・ママ図書室

受付カウンターから死角となってしまう空間があったので、「パパ・ママ図書室」にすることを提案した。絵本も置かれるが、大人を主体とした図書コーナーであり、子育てや食育、医療関連の専門書も置かれる。

□ 「ぐんぐん」の空間プログラム

「ぐんぐん」は、子育て支援施設が小規模かつ単純なので、備品の選定は難しくない。緑色をキーカラーとしてフロアマットやロールブラインドをコーディネートし、テーブルは要望に従い、足が折りたためるタイプとした。



市民防災公園子育ての駅「ぐんぐん」における備品検討
平面図

□ さいごに

本プロジェクトは、備品選定のみだったので、空間づくりにはかなりの限界があった。

建築本体設計や内装設計の段階にも関わることができたら、「てくてく」と同様に、もっと魅力のある場づくりができたに違いない。たとえば、「ちびっこ広場」のパパ・ママ図書室は小さく2部屋に間仕切られているが、それをガラススクリーンの壁に変更できれば、空間はもっと魅力的になったはずである。「ぐんぐん」では、天井の木ルーバーの茶色を、白木色に変えたかった。フローリングの色付けにも、もうすこし白味があればよかった。他にも、やりたくてもできなかったことが多くある。

「ちびっこ広場」は、上部階にマンションが積み重なる再開発ビルの中にある。再開発ビルの宿命である箱形空間と容赦なく林立する構造柱は、空間の利活用に弊害をもたらす。建設コストを抑えるべく、法的制約のみクリアされた味気のないテナント空間になりがちである。そこから、どれだけ飛躍できるかどうかは、やはり建築本体設計と内装設計による。それは、本業務である備品選定では、超えられない壁だった。

とはいうものの、「ちびっこ広場」において、「遊具と絵本が混在しているような絵本館」という長岡市のコンセプトは、本当に独創的だった。家具や遊具の選定作業も、その点でクリエイティブだった。幼少期の大切な時期に、身近にあるものがデザイン性に優れていることは重要である。「てくてく」も含め、長岡市が公共建築として実施した3つの子育て支援施設の場づくりは、市民への大きなプレゼントになったように思う。

 絵本エリア ホールの中央に、「絵本の庭」「絵本の海」小さな家、小さな屋形船。	 タウンカー2台 ポーネルト社製	 入れ替わり 乗り込んでくる	 助手席で絵本 どんな気分でしょう	 こんなに大きな絵本 見たことあるかな	 やっぱりマットの上で シンコーレザー社製
 平置き用のテーブル このようにして絵本を飾ると みな、足を止める。 HOWE社製「Tempest」。	 絵本エリアをかむ 読み聞かせの場所	 白いベンチソファ ポーネルト社製	 寝そべったり ひっくりかえったり	 テーブルがわりに 正座もできる	 おねえさんひとりで 読みふける
 絵本の森 芝生の家族ピクニック。 円形ビニルマットは、黄緑の シンコーレザー製、Φ1200。	 Diamantini Domenicom社製	 円形クッションは 長岡市による選定	 ソファークッション いいコンビネーション	 子どもには ちょうどいい大きさ	 絵本の庭では どこでも読み聞かせ
 低い本棚 こどもでも手が届く。 白木でやわらかいテイスト ドイツeibe社製品「Eduline」。	 美しい幾何学 デンマークBCI社製	 白木で低い本棚 ドイツeibe社製	 若いお父さん しっかり読み聞かせ	 ニッチには椅子が ドイツeibe社製	 「絵本の家」 ポーネルト社製
 絵本の庭の真ん中で 家族が集まって、 本をたくさんひろげて 隣には、絵本の家も車も。	 松岡達英さんの インсталレーション	 ギャラリー壁には 松岡達英さんの原画	 ギャラリースペース 大人でも楽しめる	 屋形船の中にも 本棚がある	 マグネットの釣り竿 こんなに釣れたよ
 絵本の家 入れ替わり子どもたちが。 ポーネルト社製「メリーノ ・スタジオ・リーディング」	 マゼンタ色の セブンチェア	 多目的スペース2 机：イトーキ社製	 パピ・ママ図書室1の 本棚：イトーキ社製	 パピ・ママ図書室1の ソファ：イトーキ	 ポーネルト社製の 「クライム・ベビー」
 絵本の家の中 こども2人分の小さな空間。 この中には、下にも上にも 棚があり、小さな本が並ぶ。	 地図のラグで ミニカーを走らせる	 やっぱり隅っこに 絵本を持ってきて	 マグネット・ウォール ポーネルト社製	 木製ジャングルジム ジャクエツ社製	 パピ・ママ図書室1の ビニルマット
 可動式絵本箱 床に絵本をひろげることが 前提なので、すぐそばに本箱 があればいい。ウェスコ社製。	 「ぐんぐん」 木製おもちゃとセット	 「ぐんぐん」 キーカラーは緑色	 「ぐんぐん」 折りたたみテーブル トレー付きチェア	 子ども家庭課の方々と 図書館司書と	
 椅子と絵本 デンマークBCI社製 「Puzzle」と、松岡達英さんの 絵本「びよん」。					
 パピ・ママ図書室1 白いウレタンレザーの ロングソファと本棚は、 イトーキ社製。					
 パピ・ママ図書室2 ハンス・ウェグナーの有名な Yチェアが8脚。テーブルは、 HOWE社製「Tempest」。					
 パピ・ママ図書室3 食育、育児、病気などの 専門図書が並ぶ。本棚は イトーキ社製。					
 交流広場 円形テーブルが4つ。 持ち込んだランチは、ここで。 フレーベル社製、Φ1200。					

注：日本の製品とメーカーはカタカナ、外国はローマ字で表記した。

摂田屋地区案内サイン計画策定業務

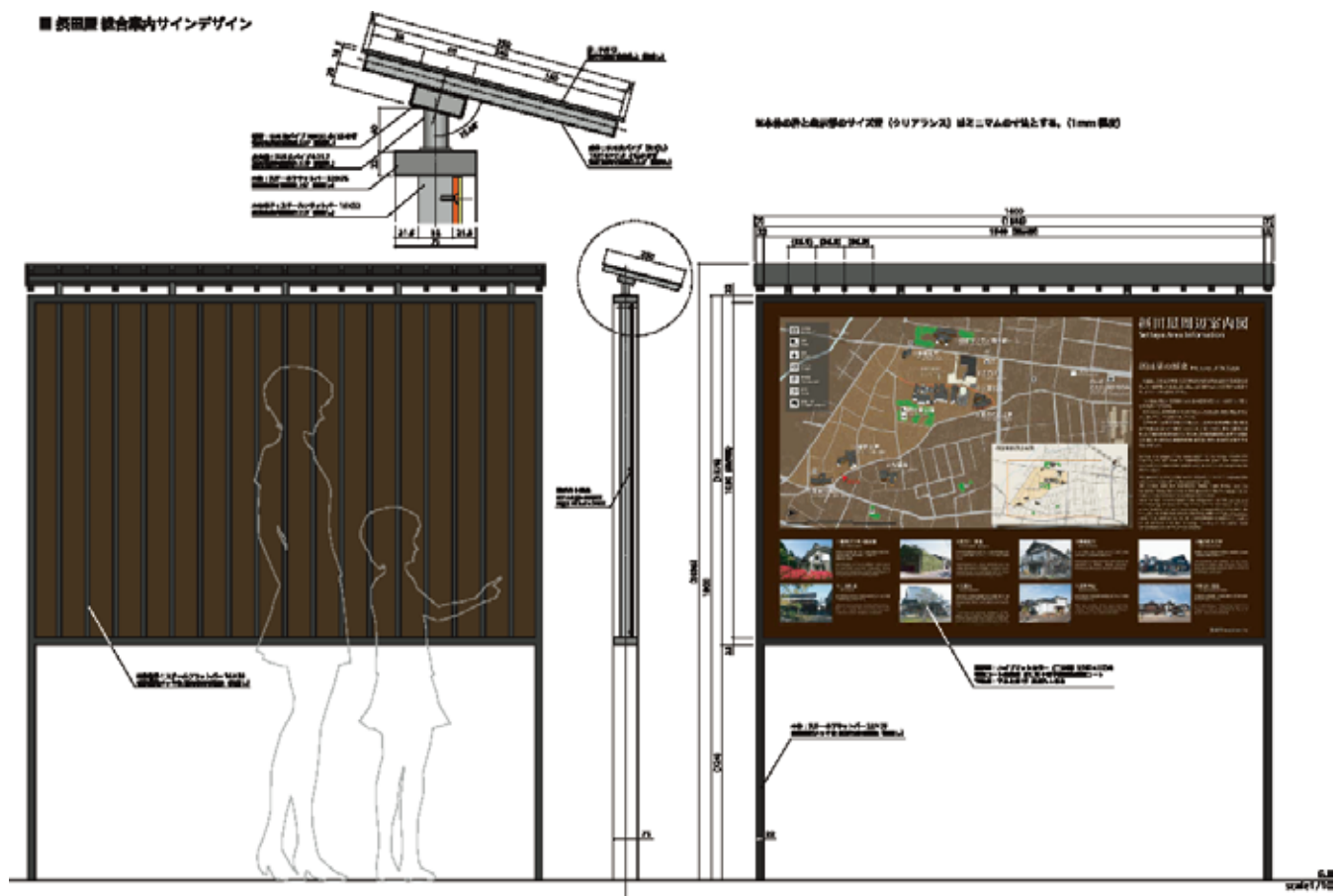
4年生／粉川睦、高橋南 3年生／松澤佑夏

醸造の町、摂田屋。JR宮内駅から徒歩10分程度の地区でありながら、なかなかどこに何があり、どんな価値があるのか分かりにくいとの意見があった。そこで、総合案内サイン、歴史的建造物説明サインをデザ

インし、平成21年度末には、総合案内サイン1基、歴史的建造物説明サイン4基が完成した。方向サイン案は住民ワークショップで意見を集約し、公道に設置可能なできるだけシンプルな案を採用することで調整することとした。



■ 浜田屋 総合案内サインデザイン



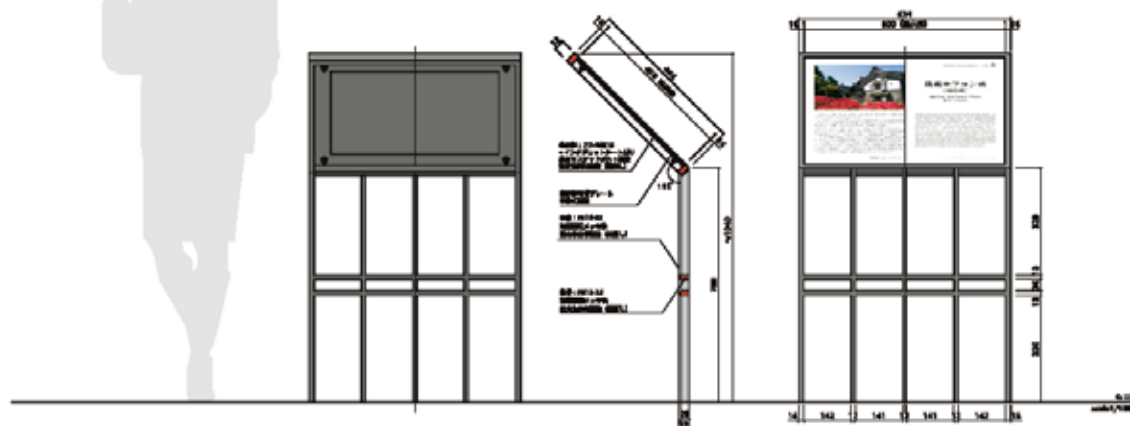
● 歴史的建造物説明看板

■ 浜田屋 総合案内サインデザイン（歴史的建造物説明看板）

浜田屋総合案内サインと同じく、フラットバー（鉄の敷板材）を用いて、
「U」をイメージした、シンプルながらもデザイン。



10-01-2





左官がコナと漆喰で描く紋、それをコナ紋と呼ぶが、残念ながらこの面白い技法がいつどこで始まったのかは分かっていない。

幸い、現存しているものが調査され全国コナ紋調べを作ろうと思えば出来る状態であるが、さて、長閑なサフラン酒の蔵ほどのあたりにランキンダされるだろうか。個人的には、「権限」にランキンしてかまわないのではないかと思う。

聖山はいくつかある。まず、大きいこと。コナ紋はふつう建物の一部に点景として描かれるが、サフランは蔵から軒から戸根まで全部これコナ紋。これほど全面展開した例は他に知らない。二つ目は、紋が大振りで、色彩が鮮やかにして多様なこと。

この二つで模範の資格は十分だが、もう一つ付け加えたい。一階部分のナマコ壁の一件である。日本の伝統的左官表現の中でコナ紋は異色の進歩きとげるのだが、ナマコ壁も同じように異色だった。なんせ、色は白と黒（灰色）のコントラスト。パターンは斜め格子なのだ。こんな就手なというかヘンな建築仕上げは世界に例はない。そしてコナ紋模様、いつどこで生まれたのか、誕生の事情が闇に包まれている。ナゾの技法二つがコンビを組み、長閑の町で土蔵入りしているのである。

藤森照信（東京大学 教授） 2009年

摂田屋の歴史的建造物・空間 ①

機那サフラン酒

[鰻絵蔵]

Quina Saffron Wine

[Kote-e Kura]

Nobody knows when and where this interesting technique started. The technique of the plasterer drawing with "kote" and plaster are called "kote-e" picture.

If there was a national list of "kote-e" building, personally, I place the warehouse of the saffron wine in Nagasaki as "Grand champion".

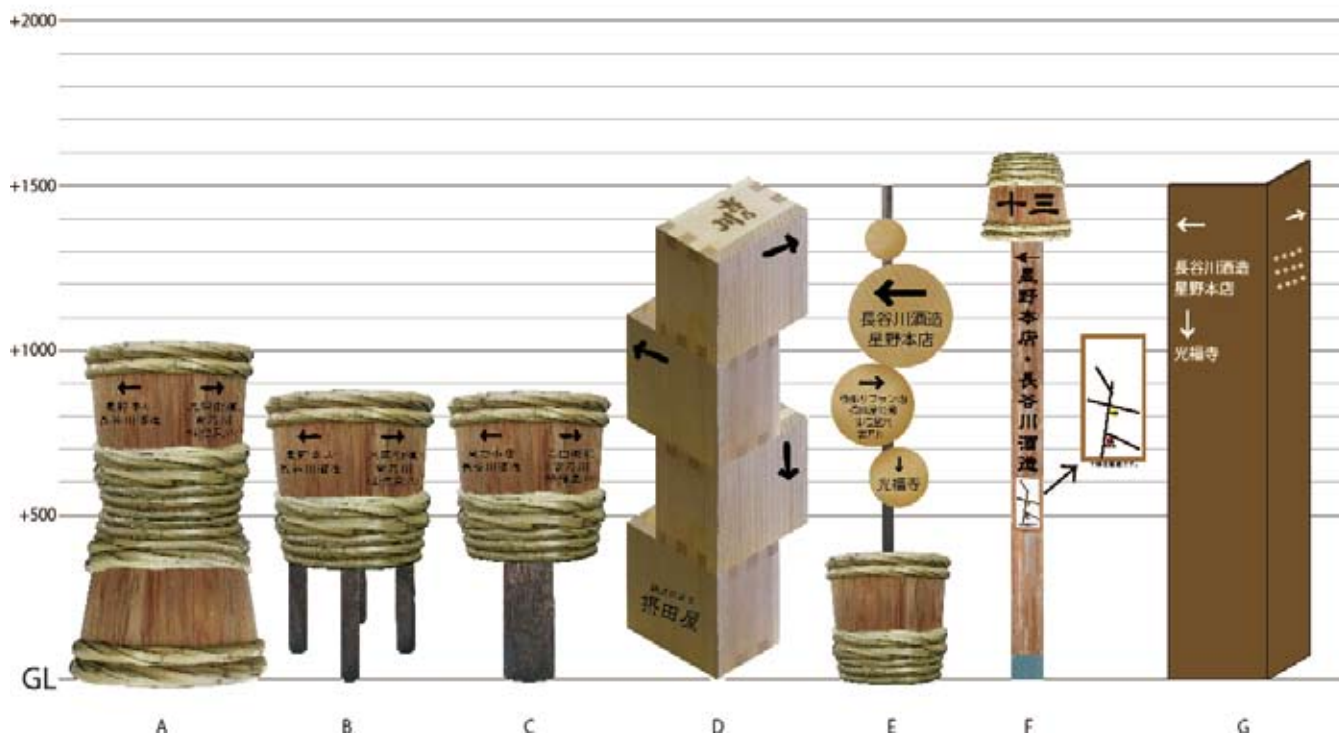
There are some reasons. First of all, be large. The warehouse are fully decorated by "kote-e". I don't know the example of developing "kote-e" like this. The second is that the size is big, vivid and variegated by the color.

I want to add another reason though grand champion's qualification has been already enough. That is the sea cucumber walls in the first floor part. The "kote-e" picture provided different advancement in the traditional plasterer technique of Japan, and the sea cucumber wall was also similarly different. Pattern of diagonal lattice can not be seen in any other country in the world. Nobody knows the birth of this pattern and reasons. Two techniques of the riddle unite the combination in Nagasaki.

Terunobu Fujisawa (Professor, The University of Tokyo) 2008

●方向案内サイン案

サイン案 モンタージュ・イメージ



1. はじめに

1-1 目的

本業務は、南魚沼市坂戸区が、中越大震災復興基金「地域復興デザイン策定支援」事業を活用して策定を行う同団体の基本計画について、計画・施策検討のための勉強会、実践、ワークショップなど運営や意見の取りまとめと基本計画作成の支援を行ったものである。なお、計画策定には平成21年、22年の2カ年を計画しており、この業務は、21年を計画作成までの準備期間と捉えている。したがって、より当地区にあった計画作成のための社会実験期間であり、この報告書も、基本的にその社会実験の途中経過報告の性格を持つ。

1-2 業務対象地域

業務対象地域は、新潟県南魚沼市 坂戸区とする。

1-3 業務内容

(1) 研究会の企画・実施

当地区にふさわしい計画策定のための、研究会（視察を含む）を企画し実施する

(2) まちづくりかわら版

当地区のこれまでのまちづくり活動の変遷、現在の状況などの情報を地区住民で共有する実験としてのまちづくりかわら版を実験的に発行する

(3) 屋台制作デザインのコーディネート

住民の活動の実験的拠点として、杉材での屋台をデザイン制作し、実際の地区イベントで活用する

(4) 報告書作成

業務の成果としての報告書を取りまとめる

2. 背景

2-1 地域内の交流活性化の必要性

本地区は、魚野川右岸の小集落が、坂戸橋などの完成を契機に六日町のベッドタウンとなるとともに、温泉地の分譲から温泉旅館も数館集積する地区である。そしてその後背地には国指定史跡である坂戸城の坂戸山がある。したがって、本地区は、①昔ながら住民、②新たに家を建てた住民、借家住民、③温泉関係者、そして④旧六日町のシンボリック存在の坂戸山ファンの4者が存在する。このうちもっとも人数が多いのは②の新たに家を建てた住民、借家住民である。今後の地域の持続のためにも、①②③④の熱心な関係者が、地

域内の祭事や美化・緑化活動を企画実践してきている。しかし、今後緩やかな高齢化が予測される中、特に②グループが地域資源を再認識し、その価値を磨くためにも、①②③④のより一層の交流活性化が求められている。

2-2 地区外からの需要

本地区は、2009年のNHK大河ドラマの主人公、直江兼続公、上杉景勝公生誕ゆかりの坂戸城址である坂戸山を東に、魚野川を西に、つまり、山と川に挟まれた南北に長い地形をしている地域である。この大河ドラマを契機に、地区外からの需要が生まれている。すなわち、

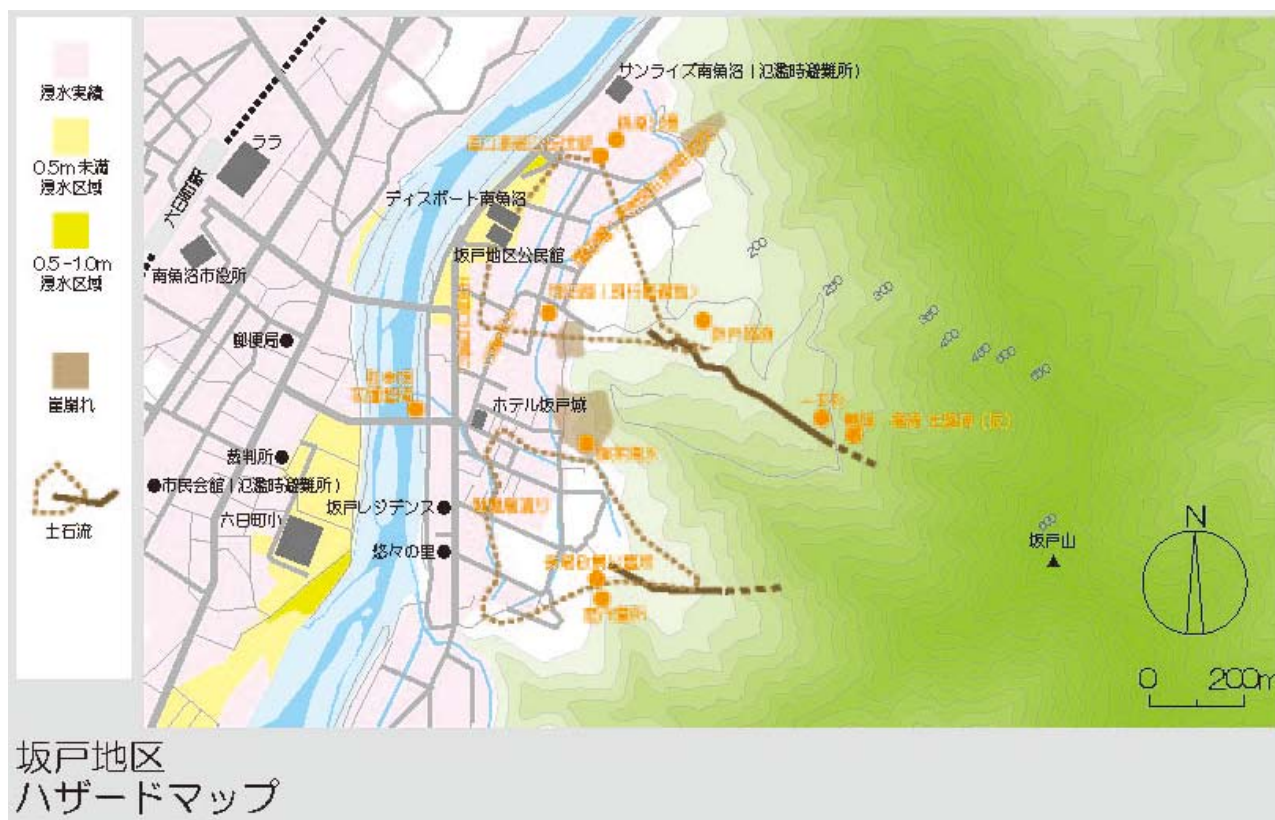
① 観光客が本地区を訪れるようになった。そのため地域の情報を分かりやすく伝えるとともに、その魅力を感じリピーターとなるような「おもてなし」の空間・サービスが提供されることが望まれている。

② 上杉景勝公と直江兼続公は坂戸地区（上田の庄）を発祥とし、春日山、会津若松、そして米沢へと移封された。大河ドラマ「天地人」は400年ほど経ったこれらゆかりの地区と連携を深め、坂戸地区の自然と歴史の豊かさを再認識する契機となりえる。そのためにも、上杉・直江公の自然と共生しながら誇り高く生きる、本家地区である坂戸地区の住民主体で地区の個性を見直す作業が求められる。

*なお、町づくりは住民が主体で自主的に進めるべきものであり、上記の背景はあくまで、本計画策定のきっかけの一つと捉える。

2-3 防災対策の必要性

坂戸地区は、すでに平成10年に坂戸区規約をもうけていたが、中越地震の経験から、平成19年に坂戸区自主防災規約を作成した。当地区は最悪時には当地区は陸の孤島になる危険性があり、防災対策の必要性は高い。



3. 實施經過

平成21年5月11日	検討組織立ち上げ	平成21年10月20日	山の暮し再生機構と事前協議（視察）
平成21年5月17日	デザイン発表会（長岡会場）、取り組みの研修	平成21年10月21日	補助金概算払請求書提出
平成21年5月21日	デザイン発表会（さわらび）	平成21年10月27日	山の暮し再生機構と事前協議（研究会）
平成21年6月1日	坂戸地区復興デザイン事業要旨説明（回覧文書）	平成21年11月1日	坂戸地区復興デザイン説明会開催（坂戸区民向け）：勉強会③
平成21年8月11日	地域づくり意識の共有化への意見交換	平成21年11月15日	かわら版の企画検討、屋台の見学会を企画提案
平成21年8月23日	地域づくり意識の共有化への意見交換	平成21年11月16日	長岡造形大学とのかかわら版、試作品、視察事前協議
平成21年9月1日	長岡造形大学委託契約締結	平成21年11月16日	かわら版「創刊号」編集依頼
平成21年9月6日	地域づくり手法の模索：勉強会①	平成21年11月20日	屋台見学会実施（長岡市撰田屋）
平成21年9月25日	認可事業計画の実行協議	平成21年11月26日	屋台製作に対する地域の想い入れを協議：勉強会④
平成21年9月26日	事前協議組織立ち上げ、事業計画の実行協議	平成21年12月12日～13日	先進地視察（米沢市）
平成21年10月5日	概算要求、地域説明会設営検討：勉強会②	平成21年12月20日	かわら版「新年号」編集
平成21年10月19日	長岡造形大学との契約行為協議	平成22年1月9日	屋台のデザイン・構造の協議・決

定：勉強会⑤

平成22年 1 月10日 坂戸地内「さいの神」に屋台を展示使用、意見収集
平成22年 1 月21日 屋台設計図の協議・決定
平成22年 2 月10日 屋台完成
平成22年 2 月13日 市主催「雪まつり」ほんやら洞にて展示使用、意見収集
平成22年 2 月24日 かわら版「年度末号」編集

作業記録

①ワークショップ

1) 坂戸ガイドブック作成のためのヒアリング

21年12月～1 月の間、坂戸地区のまちづくりキーパーソンへのヒアリング調査、および歴史関連のキーパーソンを対象にヒアリング調査を行った。この結果は部分的、まちづくりかわら版1, 2, 3に示している。今後地域のガイドブックにデータを整理する予定。

2) 屋台、ベンチ試作発表

(屋台づくりの発端)

本地区は、21年度NHK大河ドラマ「天地人」の坂戸城の麓の地区であることから、来訪者が増え、彼らをもてなす地区ボランティアの拠点として「お六のお茶のみ場」がお堀端にできた。

手作りのおにぎり等を無料で振る舞い、来訪者にも非常に好評であるほか、地域にとっても貴重な交流拠点として評価された。



間伐材で作ったお六のお茶のみ場



お六のお茶のみ場は住民参加の場

(摂田屋から借りて実験)

恒久的なハード拠点は無理でも、移動可能で、非常時には災害対応できる、そんな施設として屋台は適しているのではないかとそんな意見から、坂戸など地域のかつての人工林に多く植林されている杉材を活用した「屋台」づくりの構想が上がった。でも、雪国で屋台は可能か？そこで長岡市摂田屋地区で先行的に作成されている「屋台」を借りて、賽の神のイベントに借用してみた。



↑道路の移動は問題ない



↑雪の上はダンブに乗せる



↑こりゃ重い！一苦労だ！



世界初!? スノーボーを着脱できる雪上移動屋台!!

(雪上屋台を試作！)

賽の神での意見を元に、軽量化（分解可能）、そして雪上移動性能を上げる（スノーボードを着脱可にする）という意見が採用され、早速南雲先生にデザインを依頼。地元で試作し、南魚沼冬祭りにお披露目！大好評だった。



屋根が着脱可で軽量化成功



雪まつりで活躍



瞬く間に売り切れ御免

②研究会

第1回

日時：21年9月6日

場所：坂戸区公民館 参加：13名

講師：長岡造形大学 渡辺誠介

テーマ：復興基金の内容と活用例

坂戸地区の課題、大まかな将来構想はこれまで語り合ってきたが、復興基金について、これまで、どのような性質のものなのか、地域のリーダー間で不明であった。そこで、復興基金、活用例および坂戸としての具体的な活用案について講義してもらい、理解を深めた。



第2回

日時：21年10月5日

場所：坂戸区公民館 参加：5名

講師：長岡造形大学 渡辺誠介

テーマ：防災まちづくりと景観づくり事例—路地尊のまちづくり

路地尊とは、家の屋根に降った雨を広場などの地下の雨水貯留槽にため、手押しポンプで汲み出して利用するシステム。この路地尊は墨田区の一寺言問地区で防災まちづくりに取り組む『一寺言問を防災のまちにする会』によって考え出された。路地尊には、「災害時には避難路になり、通常は地域の広場になる路地を尊ぼう」という、防災まちづくりの住民の思いが込められている。

防災まちづくりと景観づくりの好例として紹介された。坂戸では、今回の復興基金を活用した地域住民の拠



点として「お六のお茶のみ場」のような空間を防災まちづくりに活用できないかという意見が上がった。

第3回

日時：21年11月1日

場所：サインライズ南魚沼 参加：25名

講師：長岡造形大学 渡辺誠介

テーマ：住宅地とまちづくり—長岡摂田屋地区の例—

摂田屋地区は、醸造会社と一般の住宅地が混在する地区であるが、古くからの歴史を有し、JR東日本の駅からハイキングをきっかけに来訪者が増えている地区である。ある意味、「天地人」効果で来訪者が増えているが、本質的には住宅地の坂戸地区と共通性がある。

摂田屋地区でのイベントに住民や地区のファンである学生などが参加することで、徐々にまちづくり活動が軌道に乗りつつあることが紹介された。

坂戸も、坂戸ファン、学生などとの交流の場を企画することなどが提案された。



第4回

日時：21年11月26日

場所：坂戸区公民館 参加：10名

講師：長岡造形大学 渡辺誠介

テーマ：家印とまちづくりー塩谷地区の例ー



村上市塩谷地区では、屋号や家印を住民で主体的に調査し、これを景観として活用としている。

坂戸地区でも、古くからの屋号などが残っていると
のことで、家印の基本的なデザイン要素と、塩谷のまち
づくりについて、講義した。



第5回

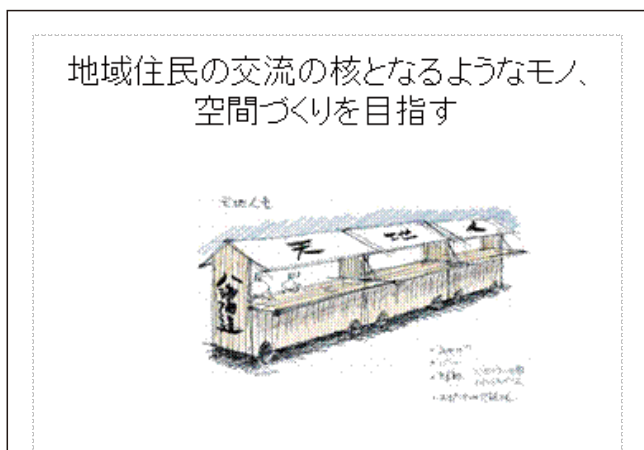
日時：22年1月9日

場所：坂戸区公民館 参加：17名

講師：南雲勝志

テーマ：杉間伐材とまちづくり（講義の後新年会をかねて懇親会）

日本中の、杉や松を活用して屋台づくりからまちづくりを進める南雲氏。「右手にスコップ、左手に一升瓶」がまちづくりのポイントだ！の一言に坂戸の皆さんは感激していた。実は南雲氏は南魚沼市出身。今後の地元での活躍は波及効果が期待される。



③視察

1. 日時 21年12月12日(土)～13日(日)

2. 場所 米沢市内

3. 概要

垣根（ウコギ）見学と米沢ウコギ垣根の会との意見交換

ウコギとは坂戸出身の戦国武将・直江兼続が米沢移封の際、垣根になり、かつ食用に活用できる材として推奨したと伝わる。現在このウコギを復活させる街づくり活動をしている芳泉町を見学する。個人の家々の垣根として「ウコギ」が植えてあり、時期的に葉が落ちていた。幹には防獣のための鋭いトゲは健在であった。場所によってはまちづくり活動が及んでいない、



芳泉町のウコギ垣根の景観



剪定がされていないウコギを見ることができ、放置すると随分広がるものと確認できた。倒木防止のためか、材木で囲ってある。

ウコギを食材とする兼続公の想いに馳せ、商品化に取組み成功した米沢ウコギ垣根の会メンバーと情報交換を行った。価格的に栄養価値を探ると共に、効能に着目しサプリメント等工夫された製品を考えられていた。ウコギの量的確保が困難なことが事業を狭めていた。商業ベースまでは考えにくい、財源的視野からは検討する価値があるのではないかという視察参加者の感想が多かった。

この視察を、さらに天地人が縁でより深まった米沢との民・民交流から、ウコギをキーワードにした活動を発展させる契機としたい。



坂戸視察メンバーとウコギ垣根の会メンバー

小野川温泉でのホテルの里と共同湯ヒアリング

（まちづくり活動）

小野川観光温泉「知」実行委員会を訪れ、初代会長河鹿荘社長「佐藤雄二」から概要を伺い、二代目会長他から現地を案内、説明を聞いた。

小さな温泉町を観光面からイベント中心で始まり、バブル崩壊後の観光客減少に歯止めをかける仕組みづくりに取り組んでいた。その中で「何処でも出前」はユニークさを感じる。旅館の一室、川辺の休憩所等、器も事後回収とのこと。当地においては、環境的に河川敷・銭淵公園等整っている。



バス待合空間がミニイベント空間

（蛍）

小野川温泉は米沢の「蛍」の名所としてブランドを確立している。当地域も自然には自負を持つ。今回の視察では蛍の整備を確認しにくい時期であったため、次回の蛍の時期の訪問機会が欲しいとの参加者の声が上がった。坂戸には銭淵公園があり、淡い光の芸術が楽しめれば、楽しいのではないか、という参加者の意見が出た。

（共同湯）

小野川温泉には河川敷に露天風呂を作っていた。総経費180万とのこと。財源はまちづくり活動（蛍の収益や、イベント）で得た資金をあてた。利用は有料（200円）で、これが管理費にあてられるとのこと。

小さな集落の温泉街だが、まちづくりの継続が感じられ、坂戸の皆さんにもいい意味で刺激になった模様。



河川敷に作られた共同湯



仮設共同湯が事実上長く営業している

地域デザイン活動支援／技術相談・センター広報

・デザインフェア

平成21年10月17日(土)、18日(日)大学を会場に、通算16回目の「長岡デザインフェア2009」が開催されました。運営は本学学長を委員長とした実行委員会が行い、本学も積極的に企画に関与しました。テーマは「デザイン力で、守ろう、つくろう、楽しもう！」でした。

デザインフェアは本学開学と同時に平成6年にスタートしたイベントです。デザインの専門大学として設立された本学は、常日頃から地域社会に対してデザインの普及、啓発に努めていますが、その活動の一つが毎年10月に開催されますこのデザインフェアです。

「デザイン」と言ってもその内容は広範に及びます。デザインフェアでは、デザインを一面的に捉えるのではなく、その広がりに着目し、様々な産業、地域資源、伝統などが再発見でき、また実際にものづくりを通してデザインを体験できる催しになっている点が特徴です。

それでは、具体的に21年度デザインフェアの事業内容をご紹介します。

☆守るデザイン

『まちなみを守るデザイン』『伝統を守るデザイン』『地球・大地・食を守るデザイン』と3つのカテゴリーに分けて合計7つのイベントを実施しました。具体的には、「長岡市庭園巡りバスツアー」と題した地元の景勝地を巡るツアーや、「風呂敷の包み方実践講習会」と題し、様々な風呂敷の結び方を学ぶ催しなどを行いました。

☆つくるデザイン

「元気な開発企業をつくるデザイン」「市内の大学、クリエイターがつくるデザイン」「トップクリエイターがつくるデザイン」の3つに分けて計9つのイベントを開催しました。新潟発の国際ブランド「百年物語」の紹介、本学学生の作品展示、「秋山 孝ポスター美術館長岡」を会場にして秋山氏の対談形式のトークイベントなどが実施されました。

☆楽しむデザイン

「自由に発想して楽しむデザイン」として、主に子供たちの発想力を育みながらものづくりを体験できる催しを開催しました。

2日間で延べ3,000人の方々お越し下さり、校内は常に人で溢れ大盛況なイベントになりました。地域に開かれた大学として今後もデザインフェアの発展に努め、『デザイン』の普及、振興に努めていきたいと考えます。



オープニングの様子



似顔絵コーナー



丸太切り体験

・長岡産業活性化協会NAZEでの活動

NPO法人NAZE（長岡産業活性化協会）は、企業、大学等教育機関、産業支援機関、地域金融機関、商工団体、行政等が有機的かつ濃密に連携して従来型の組織とは異なる「産業界」主体の組織として、新技術の開発や新事業を次々と生み出す「ものづくり拠点地域」を形成することを目的とし、平成17年4月に設立されました。（NPO法人化 平成21年4月1日）

本学は、設立と同時に加入しこれまで活動に参画してきました。平成21年度は、「企画・情報部会」（旧情報化部会）に所属し、WEBや広報物等を使ったPR事業について協力しました。

・センターの近況

本年は合計18件の受託事業を実施することが出来ました。大学の資源を有効に活用しようとお声掛け頂いた依頼者の方々には、御礼を申し上げます。

デザイン研究開発センターが大学の附属機関ある以上、プロジェクトに参加する学生の教育的効果を最大限考えなければなりません。参加をするプロジェクトは真に学生にとって生きた教材です。もちろん学生はプロのデザイナーではなく、必ず教員のサポートが必要なのですが、学生がクライアントからの要望を聞き、広く社会のニーズを受け止めて、新たなデザインを考えていくことは大変貴重な経験であることは間違いありません。

今回お受けしたプロジェクトはどれも充実したもので、大学にとって有益なものばかりでしたがその中の1つ、シンワ測定㈱さんからお受けした「2連目盛温湿度計デザイン業務」（P5－6）において、学生がデザイン提案した案が商品化されることになりました。このことは、デザインをした本人にしてみれば大きな自信に繋がるものですし、大学としても誇れる教育的成果だと考えます。

今後も企業のニーズに応えられるようなデザイン提案ができるのと同時に、学生にとって貴重な教育の場となるような「Win Win」の関係が、デザイン研究開発センターの受託プロジェクトで築いていければと思っています。

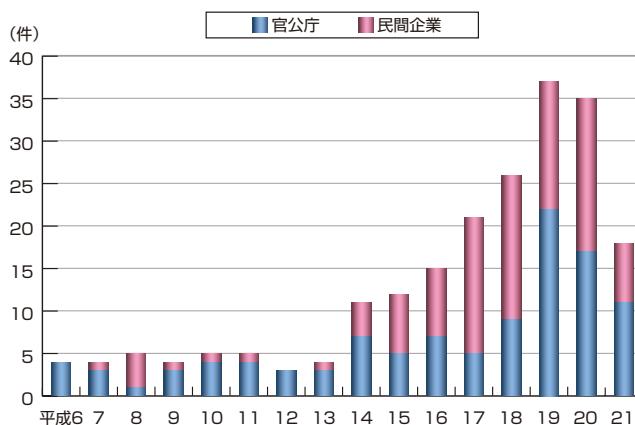


図1 機関別プロジェクト数

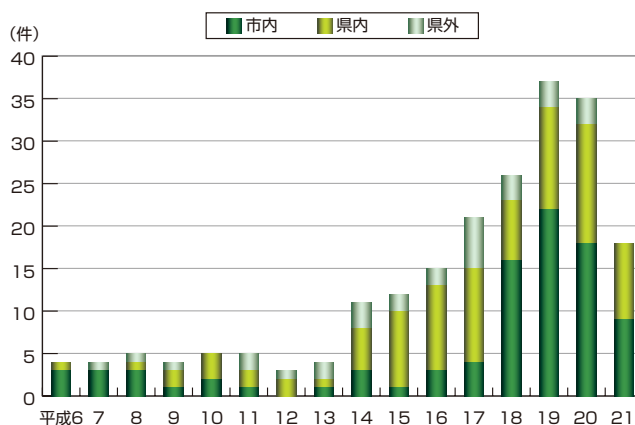


図2 地域別プロジェクト数

・デザイン相談の受付

長岡造形大学デザイン研究開発センターでは、寄せられたデザイン相談の内容に応じて様々なメニューを用意しています。ご相談は以下のように本学にて対応いたします。

デザイン相談の受付

デザインに関する相談は、電話・FAX等で長岡造形大学総務企画課にて随時受け付けています。

電 話

▶ まずはお気軽にお電話下さい。TEL 0258-21-3311(代)

FAX・Eメール

▶ 「デザイン相談申込用紙」にご記入いただきFAX又はEメールにてお送りください。

FAX 0258-21-3312

Eメール kikaku@nagaoaka-id.ac.jp



内部協議 ～ 両者打合せ

頂いた相談内容をセンターで把握し、打合せにて詳細内容を再度お伺いいたします。
その後、ご相談内容に沿った最も適切な方策をご提案いたします。以下が主なメニューとなります。



①受託研究・委託によるデザイン提案

委託契約に基づき、担当する教員が調査研究又はデザインを提案いたします。メンバーには学生も参加します。

②外部デザイン事務所の紹介

ご相談内容に応じて外部デザイン事務所を紹介いたします。

③学生コンペ

学生に広くデザイン案をお求めの場合は、本学学生を対象に学内コンペを行ないます。

④教員による専門的アドバイス等

デザイン全般に関して専門的知見からアドバイス及びコンサルティングをいたします。



「①委託によるデザイン提案」の場合、以下のとおり業務が進行いたします。

主査の決定 ～ 業務委託契約

ご相談内容に応じて本学教員の中から適任者（主査）を決定します。
業務の方法、期間、予算等について、両方で協議を重ね、業務委託契約を締結し、業務がスタートします。
ただし、授業その他の学事が優先されますのでご了承ください。



成果物の提出・業務終了

成果物を提出し、委託元の検収後、業務終了となります。

・センターの担当教員

長岡造形大学の全教員は、デザイン研究開発センターの諸プロジェクトの担当教員であり、各自の専門・研究分野の特性に応じて、プロジェクトに関与します。

なお、以下に本学教員の氏名と専門分野を示しますのでご参照ください。（注：職名及び専門分野は平成22年10月1日現在を掲載しています。）

氏 名	専 門 分 野
教授 上山良子	ランドスケープアーキテクチャー、アーバンデザイン
教授 石原 宏	西洋美術史
教授 上野裕治	ランドスケープ計画・設計、植物生育環境、緑地環境
教授 木村 勉	建造物保存修復
教授 後藤哲男	建築・都市設計
教授 境野広志	工業デザイン
教授 菅原 浩	比較文化論、表象文化論
教授 鈴木均治	テキスタイルデザイン（染色）
教授 土田知也	工業デザイン
教授 長瀬公彦	グラフィックデザイン、イラストレーション
教授 長谷川博紀	グラフィックデザイン・広告全般
教授 馬場省吾	金属工芸（鍛金造形）
教授 飛田範夫	日本庭園史
教授 ヨールグ ビューラ	マルチメディア、アート教育
教授 平山育男	建築史
教授 松本明彦	写真、デジタルフォト
教授 森 望	ディスプレイデザイン
教授 森田 守	デザイン／意匠行政論、意匠法、知的財産権制度
教授 山下秀之	建築意匠
教授 和田 裕	プロダクトデザイン
教授 天野 誠	グラフィックデザイン（エディトリアルデザイン）
教授 江尻憲泰	建築構造
教授 大森 修	国語科教育・教育方法
教授 川口とし子	建築・インテリア・プロダクトのデザイン

教授 熊井恭子	テキスタイルデザイン
教授 原子 力	マンガ全般・イラストレーション
教授 アンドリュウ バン	ゴースム
TESOL-Teaching English to Speakers of Other Languages	
教授 福田 毅	グラフィックデザイン、広告全般
教授 結城和廣	美術科教育、総合学習
准教授 吉川賢一郎	グラフィックデザイン
准教授 小林花子	彫刻
准教授 澤田雅浩	都市計画、都市防災
准教授 新海俊一	建築計画、建築設計、情報科学
准教授 高崎賀朗	現代絵画（油彩・ミクストメディア・スクリーンプリント）
准教授 長谷川克義	金属工芸（鋳金）
准教授 真壁 友	デジタルデザイン、メディアアート
准教授 渡辺誠介	都市計画、観光とまちおこし
准教授 岡谷敦夫	油彩、版画（銅版、リトグラフ、木版）
准教授 川越ゆかり	服飾デザイン、製作
准教授 菅野 靖	金属工芸（彫金）
准教授 中村和宏	ガラス工芸
助教 金澤孝和	工業デザイン

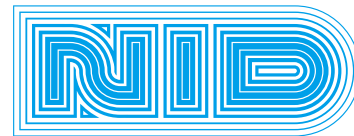
長岡造形大学デザイン研究開発センター 平成21年度活動報告

発行日：平成22年10月1日
 発行：長岡造形大学デザイン研究開発センター
 940-2088 新潟県長岡市千秋4丁目197番地
 TEL. 0258-21-3311（代表）
 FAX. 0258-21-3312

長岡造形大学ホームページ
<http://www.nagaoka-id.ac.jp/>
 Eメールアドレス
kikaku@nagaoka-id.ac.jp
 表紙撮影：松本明彦

本書の図版及び文章の無断転載を禁じます。
 Copyright©2010 Nagaoka Institute of Design All rights reserved.

デザイン相談申込書



この度は、本学デザイン研究開発センターにご相談いただき誠にありがとうございます。
この用紙は、ご相談の参考資料として使用いたします。ご自由にご記入いただき、
FAX又はE-MAILで用紙をお送りください。

長岡造形大学
デザイン研究開発センター
TEL 0258-21-3311
FAX 0258-21-3312
E-MAIL kikaku@nagaoka-id.ac.jp

		申込日		平成	年	月	日
申 込 者	企業名等						
	住 所	〒 -					
	T E L		F A X				
	ご担当者		部署/役職				
	E-mail		U R L				
デザイン 相談分野 (複数回答可)	プロダクトデザイン			建築・環境デザイン			
	☐ 産業機械 ☐ 電化製品 ☐ IT機器 ☐ 日用品 ☐ 雑 貨 ☐ 乗り物 ☐ ファッション ☐ その他			☐ 建築設計 ☐ 空間デザイン ☐ インテリア ☐ 景 観 ☐ 調 査 ☐ 計 画 ☐ イベント ☐ その他			
	視覚デザイン			美術・工芸デザイン			
	☐ 広 告 ☐ ロゴマーク ☐ アニメーション ☐ WE B ☐ C I ☐ パッケージ ☐ 写真・映像 ☐ その他			☐ 絵 画 ☐ 金属工芸 ☐ ガラス工芸 ☐ 彫 刻 ☐ テキスタイル ☐ オブジェ ☐ 木彫品 ☐ その他			
内 容							
業務の形態 (複数回答可)	☐ 教員によるデザインワーク ☐ 学生コンペ ☐ 学生によるデザインワーク ☐ その他 () ☐ 外部デザイン事務所等の紹介 ☐ わからない						
期 間 (スケジュール)	開始時期： (製品化予定、販売予定等) 終了時期：						
ご 予 算							
備 考							

受 付 日	平成	年	月	日	受 付 者	
-------	----	---	---	---	-------	--

